

人生が意味をもつためには、どのような物語 が必要なのか*

太田泰幹

概要

In this paper, I will examine the views known as narrativism about meaning in life. Narrativism refers to a set of views that hold that narrative, in some sense, contributes to meaning in life. While these views have garnered considerable support in the philosophy of meaning in life, the debate surrounding it is far from clear. The issue arises because, not only is the concept of “meaning in life,” which is to be explained, ambiguous, but the concept of “narrative,” which is supposed to explain it, also varies among different theorists. In light of these circumstances, this paper has two aims. First, I will clarify the concepts of “narrative” as the explanans and “meaning in life” as the explanandum. By doing so, the ambiguity surrounding the narrativist debate should be reduced, making it easier to grasp the overall picture. Second, I will review and evaluate existing narrativist claims and propose a more persuasive view as an alternative. This paper proceeds as follows. I will first clarify the concepts of “narrative” and “meaning in life” (section 2). This clarification will reveal that narrativism can be theoretically divided into three variants: the story view, the recounting view, and the narrative view. Existing narrativist views can be classified under the story view and the recounting view, so I will first examine the story view (section 3) and then the recounting view (section 4), reviewing and evaluating the claims of each. In my view, while both the story view and the recounting view capture important aspects of meaning in life, they still leave some challenges to be overcome. Therefore, I will present a new narrativist view, which falls under the narrative view, as an alternative to these views (section 5).

Keywords: 人生の意味, 物語, 情動

* CAP Vol. 16 (2025) pp. 110-142. Submitted: 2024.10.26. Accepted: 2025.04.30. Category: 研究論文(原著論文).
Published: 2025.05.14.

1 はじめに

しばしば、人生は物語に喩えられる。吾峠呼世晴の漫画『鬼滅の刃』を例にとろう。『鬼滅の刃』は、主人公・竈門炭治郎^{かまどたんじろう}と人を喰う鬼との戦いを描いた物語だ。その最終話は、それまでに描かれた炭治郎たちと鬼との戦いについて、語り手が次のように思いを馳せるシーンから始まる。「人の人生は物語だから。僕の人生は、僕が主人公の僕だけの物語。百年前も二百年前も、千年前だって、人の数だけ物語があったんだ」(句読点筆者、吾峠 2020: 195-6)。もちろん、『鬼滅の刃』はそれ自体が炭治郎を含むフィクショナル・キャラクターの人生についての物語なわけだが、ここで語り手はそういうことを言っているわけではなく、〈一般に人生は物語として捉えることができる〉と言っているのだ。本稿で検討したいのは、このように人生と〈物語 narrative〉との関係に注目することで〈人生の意味 meaning in life〉という概念を説明しようとする、〈物語主義 narrativism〉と呼ばれる見解についてである。

一言で言えば、物語主義とは〈何かしらの意味での物語が人生の意味に貢献する〉と主張する見解だ。しかし、物語主義を巡る議論は見通しが良いとはいえない。まず、被説明項である〈人生の意味〉とは何かが曖昧だ。少なくとも、分析哲学の領域において〈人生の意味〉が盛んに研究されるようになったのは1980年代頃からと比較的新しく、未だその本性についての合意は形成されていない(cf. Metz 2023)。また、説明項である〈物語〉がどういう意味で使われるかも論者によって異なる。そのため、物語主義がうまくいっているかを評価するためには、どのような意味で〈物語〉や〈人生の意味〉という概念が使われているのか、なぜ両者に関係があると言えるのかに関する各論者の議論を丁寧に追っていく必要がある。

こうした議論状況を踏まえ、本稿では二つのことをめざす。第一に、物語主義の説明項である〈物語〉と被説明項である〈人生の意味〉という概念について整理する。そうすることで、物語主義の議論にまつわる曖昧さが低減され、その全体像を把握しやすくなるはずだ。第二に、その上で既存の物語主義的見解の主張を確認・評価し、それらに代わるより説得的な理論を提案したい。

本稿の議論は以下のように進む。まず、〈物語〉と〈人生の意味〉の概念について整理する(第2節)。それにより、物語主義は理論的にはストーリー説・語り説・物語説の3種類に分けられることが明らかとなる。その枠組みにおいて、既存の物語主義はストーリー説と語り説に分類されるので、まずはストーリー説を(第3節)、次いで語り説を取り上げ(第4節)、それぞれの主張を確認・評価していく。私の考えでは、ストーリー説と語り説はどちらも人生の意味に関する重要な側面を捉えているものの、克服されるべき課題も残している。そこで、物語説に分類される新しい物語主義的見解をそれらの対案として提示する(第5節)。

2 物語と人生の意味

本節の目的は、〈物語〉と〈人生の意味〉という概念の整理を通して物語主義の主張を明確にすることだ。2.1で〈物語〉について、2.2で〈人生の意味〉について整理した上で、物語主義の主張を物語主義テーゼとして定式化する。その上で、2.3では物語主義というプロジェクト自体に疑義を呈する議論として Galen

Strawson (2004, 2007, 2020, 2022) の反物語主義を取り上げ、その批判に応えられる理論であるための要件を確認しよう。

2.1 物語

物語主義における物語概念の意味について見ていく前に、まず「物語」という語がいかに多様な文脈で使われているかを確認しておく。第 1 節で『鬼滅の刃』という漫画を例に挙げたように、物語と言えば典型的には漫画や小説におけるそれを指すだろう。そのようなフィクショナルな物語については、当然ながら文学研究や文芸批評の名の下に論じられている。他方で、物語はフィクショナルなものに限られない。たとえば、大病を患ったことをきっかけに自分の人生を誰かに向けて語るとき、それはその人の人生の物語だと言えよう。このようなノンフィクショナルな物語は、ライフストーリー研究やグラウンデッド・セオリー・アプローチなどにおける社会的な関心の対象だ (cf. やまだ 2008)。

このように何かしらの意味での物語を被説明項とする研究に対し、説明項に物語概念を据えて何かに迫ろうとする試みは広く〈ナラティヴ・アプローチ〉と呼ばれている。その中には社会や文化について分析する社会学や文化人類学などのアカデミックな研究だけでなく、臨床・司法領域や企業・組織経営などにおける実践的な方法論も含まれる^{*1}。

以上のように物語概念は多種多様な関心の下で扱われるため、その統一的な意味を特定することは難しいし、そのようなことをする必要もない。本稿の目的は〈人生の意味〉という概念を物語概念によって説明する見解、すなわち物語主義を評価し、提案することにあるので、上で確認した内容に基づく本稿の議論は分析哲学的なナラティヴ・アプローチに位置づけられる。したがって、本稿の目的のためには人生の意味へのナラティヴ・アプローチに必要な限りで物語概念について整理すれば良い。そのために、本稿では高田敦史 (2017) の議論を参照する。理由は以下の通りだ。高田によれば、2010 年頃から分析美学において物語の哲学が盛り上がりを見せている。ただし、その注目の対象は小説や映画のようなフィクショナルな物語にとどまり、現実の人生などを物語として捉えるナラティヴ・アプローチに対して分析美学的物語論はとくに関心を寄せてこなかった。しかし、分析美学的物語論に内在的な観点からも、ノンフィクショナルな物語に関する議論を避けることはできないと高田 (2017: 35) は主張する。このように、高田 (2017) は分析美学的物語論とナラティヴ・アプローチとの接続を企図して書かれており、そのために必要な物語概念の分析は人生の意味へのナラティヴ・アプローチにも適用可能なはずだ。そこで、以下では高田による物語概念の分析を確認しよう (高田 2017: 36-7)。

まず、いささか拍子抜けする導入ではあるが、分析美学的物語論において物語の必要十分条件に関する合意はなく、それを与えるつもりもないと高田は述べる。それでも、多くの論者が認める物語の必要条件は特定することができる。それは、いくつかの出来事を表すものであるということ、すなわち〈一連の出来事の表象である〉ということだ。実際、既存の主要な物語主義者として第 3 節と第 4 節で取り上げる Antti Kauppinen (2012: 358) と Helena de Bres (2018: 547-8) も、〈物語〉をそのように特徴づけている。

^{*1} ナラティヴ・アプローチを含む物語研究の多様性については、野口裕二 (2009) のとくにはしがきと序章を参考にまとめた。

その上で、物語の必要十分条件を特定することはできないが、その**典型的な特徴**を挙げることはできると高田は続ける。高田によれば、物語とは典型的には時間的・空間的に隣接し、因果関係や関連性によって結ばれた一連の出来事の表象である。たとえば、「2 は偶数である。1707 年に富士山は噴火した。織田信長は本能寺で死んだ」(高田 2017: 36)という文章は、いくつかの出来事(や事実)の表象ではあるものの、それらの間には時間的前後関係や因果関係がないため、少なくとも典型的な物語とは言えない。それに対し、「私はお腹が減っていたので、買い物に出かけた。その途中で古い友人に偶然出会い、お腹が減っているのも忘れて話し込んでしまった」(高田 2017: 37)は、典型的な物語だと言える。まとめると、物語とは一連の出来事の表象であり、典型的にはその出来事間に時間的前後関係や因果関係が見られるようなものだ。

このように緩い特徴づけでは、〈物語〉についてとくに興味深いことは明らかにできていないように思われるかもしれない。しかし、〈一連の出来事の表象である〉という物語の必要条件を確認しておくことは本稿の議論にとって重要である。なぜなら、そうすることで〈物語〉と混同されがちな二つの概念、すなわち〈ストーリー〉と〈語り〉を区別できるようになるからだ(高田 2017: 37)。まず、物語が一連の出来事を表象するものであるならば、物語それ自体と物語が表象するもの(i.e. 一連の出来事)は概念上区別できる。たとえば、さきほどの典型的な物語と、〈私は買い物に出かけた〉〈その途中で古い友人に出会った〉〈その友人と話し込んだ〉という一連の出来事は、それぞれ別のものだ。そこで、表象されるものである一連の出来事のことを、〈物語〉と区別して〈ストーリー〉と呼ぶことにする。次に、ストーリーの表象それ自体(i.e. 物語)とストーリーを表象する行為も概念上区別することが可能だ。再び先述の典型的な物語を例にとると、その文章自体とそれを書いたり話したりするという行為もまたそれぞれ別のものである。そのため、ストーリーを表象する行為は〈語り〉と呼んで〈物語〉と区別することにしよう。議論の目的によっては、必ずしもこうした概念上の区別は必要ない^{*2}。しかし、物語主義について検討するという本稿の目的においては、説明項の「物語」がどの意味で使われているのかを明確にしなければ議論に混乱が生じるため、以下では本項で確認した通りの意味で「物語」「ストーリー」「語り」という言葉を使い分けることにする。

ここまで、人生の意味へのナラティブ・アプローチに必要な限りで物語概念について整理してきた。続いて〈人生の意味〉の分析へと移る前に、物語概念に通暁した読者であれば気に掛けるであろう問題について確認しておく。それは〈物語とストーリーとでは、どちらが基礎的なのか〉という問題だ。この問題について、高田(2017: 41-2)は〈物語から独立にストーリーという一連の出来事が存在し、それを物語が表象する〉という見解に立っている。これをストーリー先行説と呼ぼう^{*3}。他方で、〈物語から独立にストーリーは存在できない〉と主張する論者もいる(e.g. Danto 1965=1989: ch. 3; MacIntyre 1984=2021: ch. 15; Taylor 1989=2010: ch. 2; 野家 2005: 序)。一例として、野家啓一(2005: 11-2)の議論を確認しておこう。野家は、「私が提案した奇襲作戦は味方の部隊を勝利に導いた」という物語を取り上げて、以下のように

^{*2} 一般にナラティブ・アプローチにおいては、本項で見た〈語り〉と〈物語〉の両方の意味を含む語として〈ナラティブ〉が使われている(野口 2009: 1-2)。

^{*3} 正確には、高田(2017: 42)は「ストーリーは、物語が話題にしている出来事である」という出来事的ストーリー観と、「物語性の担い手は、少なくとも部分的には、それが話題にするストーリーである」というストーリー構成説の二つを擁護している。

論じる。この奇襲ののちに、実はこの部隊は別部隊の支援要請を無視して作戦を強行してしまい、むしろ大局を誤って味方に大損害を与えたことが明らかになったとしよう。すると、先の物語においては称賛に値する出来事であったはずの〈奇襲作戦の提案〉は、「私が提案した奇襲作戦は味方に大損害を与えた」という物語においては非難に値する出来事へと変わる。このように「コンテキストから孤立した純粋状態の『事実そのもの』は、物語られる歴史の中には居場所をもたない。脈絡を欠いた出来事は、物理的出来事ではあれ、歴史的出来事ではない」と野家(2005: 12)は主張する。ここで示唆されているのは、物語に先んじて存在する一連の出来事などというものはない、すなわち〈物語から独立にストーリーは存在できない〉という考えだ。このような見解を物語先行説と呼ぼう。

それでは、ストーリー先行説と物語先行説のどちらが正しいのだろうか。これは物語の定義論と同様に合意のない大きな問題であり、本稿の射程を超えている。そこで、本稿ではこれ以上この問題には踏み込まず、ストーリー先行説が正しいと仮定して論を進めたい。その理由は二つある。第一に、高田も指摘する通り、人生を物語として捉える物語主義者の主張はストーリー先行説を前提している。さきほど確認したように、既存の主要な物語主義者は〈物語〉を一連の出来事の表象として扱っているのだった。すると、人生は一連の出来事を表象する行為(i.e. 語り)でも表象それ自体(i.e. 物語)でもないため、物語主義者が「人生は物語である」と主張するときの「物語」は一連の出来事、すなわちストーリーとして解釈する他ない(高田 2017: 43)。このことは、ストーリー先行説が正しいと仮定する第二の理由とも関連している。もし物語先行説が正しいとすれば、その部分であれ全体であれ、人生を構成する一連の出来事は物語なしには存在しえないことになる。しかし、これはもっともらしくない。たとえば、私が買い物に出かけ、その途中で友人と出会い、話し込んだとする。その上で、私とその友人がそれらの出来事について語ることは生涯なかったとしよう。だからといって〈私は買い物に出かけた〉〈その途中で古い友人に出会った〉〈その友人と話し込んだ〉という一連の出来事が存在できなくなるわけではないはずだ^{*4}。以上より、物語主義について検討する上でストーリー先行説を仮定することには一定の合理性がある。以下では、ここまで見てきた高田による物語概念の分析を前提に議論を進めていく。

2.2 人生の意味

前項では、物語主義の説明項である物語概念について確認した。本項では、被説明項である〈人生の意味〉について整理する。

第1節でも述べたように、物語主義を巡る議論の見通しが悪いのは説明項である物語概念が論者によって様々な使われ方をするからというだけではなく、そもそも被説明項である〈人生の意味〉とは何かが曖昧

^{*4} ストーリー先行説(正確に言えば、注3で触れたストーリー構成説)を支持する根拠について、高田は次のように述べる。「因果関係や出来事の個性や時間的前後関係による物語の特徴付けは基本的に正しいものだろう。しかしその場合、私たちは、それは実際にはストーリーの特徴だと言うべきだろう。因果関係や出来事の個性や時間的前後関係は、語られた出来事の側にある性質であって、それを語る物語の性質ではないからである。少なくとも、複数の出来事の間に因果関係や時間的前後関係が成り立つのは、それが物語によって語られたからであると言うことは明白なまじがいろいろ(高田 2017: 42)。このように、少なくとも「典型的にはその出来事間に時間的前後関係や因果関係が見られるようなもの」として緩く特徴づけられるストーリーについては、物語なしに存在可能だと私は考える。

味であることもその一因である。人生の意味の概念分析に関してはとくに Thaddeus Metz (2007, 2013, 2022, 2023) の貢献が大きく、この 20 年を通して人生の意味に関する標準的見解が整備されていった。しかし、それはあくまで**標準的**見解であって、合意であるとはいえない。そこで、本項でも物語概念の分析と同様に、本稿の議論に必要な限りで〈人生の意味〉について整理する。具体的には、Metz が整備した人生の意味の標準的見解、とくにその主著である Metz (2013) における概念分析のうち、既存の主要な物語主義者も同意するであろう特徴づけをもって〈人生の意味とは何か〉という問いに対する暫定的な回答としたい。以下では、この条件を満たす人生の意味の三つの特徴についてそれぞれ見ていく。

第一の特徴は、人生の意味の〈担い手 bearer〉についてである。Metz によれば、人生の意味をもつものの、すなわち担い手は(基本的には)主体の行為だとされている (Metz 2013: 65-6)。あらためて、『鬼滅の刃』の主人公である炭治郎の人生を例にとろう。炭治郎は、人々の暮らしを守るために鬼と戦い続けた。主体の行為が人生の意味をもつということは、人々を守るため鬼と戦うという炭治郎の行為がその人生を意味あるものにするということであり、これは人生の意味という概念の特徴づけとしてもっともらしいように思われる。明確にそう述べているわけではないが、既存の主要な物語主義者である Kauppinen と de Bres もこの特徴づけを認めるはずだ。議論を先取りして言うと、まず Kauppinen は人生を行為という出来事の集合^{*5}、すなわちストーリーとして捉えた上で、ある種のストーリーが主体の人生に意味をもたらすと主張する。したがって、Kauppinen の議論は行為が人生の意味の担い手であるという特徴づけを前提していると考えられる (cf. Kauppinen 2012: 352)。一方、de Bres は (3.2 で見るように) そんな Kauppinen の議論を批判しているが、出来事が人生の意味をもつという点では Kauppinen と説明図式を共有している (de Bres 2018: 552-3)。したがって、de Bres もこの特徴づけを認めるだろう。

第二の特徴づけに移る。標準的見解によれば、人生の意味は〈幸福 happiness〉とは区別される〈個人的価値 personal goods〉である (Metz 2013: 73-4)^{*6}。「幸福」も論者によって異なる使われ方をされることが多い語であるため扱いには注意が必要だが、少なくとも「快樂 pleasure」の同義語としての「幸福」とは異なるような個人的価値として人生の意味を捉えるという点では、Kauppinen と de Bres も Metz と軌を一にしている (Kauppinen 2012: 371-4; de Bres 2018: 546-7; cf. Kauppinen 2013)。再び、炭治郎の事例を取り上げよう。鬼との戦いの日々は、炭治郎にとって幸福であるどころか、むしろ苦痛だったはずだ。それでも、炭治郎にとって鬼と戦うことには意味・価値があった、という解釈は『鬼滅の刃』の読みとして自然だろう。このように、人生の意味は幸福とは区別される個人的価値だと考えられる。

第三に、人生の意味はそれに対して適切な (appropriate)、あるいは適合的な (fitting) 情動の観点から分析できるとされている (Metz 2013: 69-70)。適切性・適合性はしばしば互換的に使われる言葉であり、その本性は何かという問題は価値論において熱心に議論されている最中だ (e.g. D'Arms & Jacobson 2000, 2023; Rabinowicz & Rønnow-Rasmussen 2004; Prinz 2007; Tappolet 2016; Naar 2021; McHugh &

^{*5} 行為が出来事の一つであるという見解は、Donald Davidson (1980=1990) 以降広く受け入れられている (cf. 柏端 1997; Casati & Varzi 2023)。

^{*6} 本稿では、個人的価値を福利 (well-being)、福祉 (welfare)、打算的価値 (prudential value)、自己利益 (self-interest) などの同義語として扱う。

Way 2022)。そこで、適切性・適合性の本性については開いたままにしておき、ここでは〈人生の意味はそれに対して適切な情動の観点から分析できる〉とはどういうことかについての直観的な理解の確保に努める。Metz によれば、人生の意味を担う行為に対して向けるのが適切な情動とは〈誇り〉である。たしかに、鬼と戦って人を守ることができたなら、炭治郎は自らの行いを誇りに思うだろう。反対に、誇るべきでない行為は人生の意味をもたないように思われる。たとえば、正当な理由なく仲間を殴ることは誇るべき行いではないし、そのような行いが人生の意味をもつことはないだろう。このように、人生の意味と誇りという情動との間には何かしらの結びつきがあるように思われる。同様に、Kauppinen も適合的な情動の観点から人生の意味を分析する。Kauppinen (2012: 352-5, 2013: 163-6) は Metz よりも幅広く、誇りの他に充足感・喜び・(ある種の) 希望・高揚感なども人生の意味に対して適切な情動に含める^{*7}。de Bres の議論はとくに人生の意味と情動との関係に焦点化したものではないが、Kauppinen の分析を前提に進められるため (de Bres 2018: 560)、de Bres もこの特徴づけに同意すると考えていいだろう。

このように、人生の意味は (1) 主体の行為によって担われ、(2) 幸福とは区別される個人的価値であり、(3) それに対して適切な情動の観点から分析される、という三つの特徴づけは、標準的かつ本稿で扱う物語主義者も認めると考えられるものである。ただし、先述の通りこうした見解を受け入れない論者もいる。とくに、物語主義者である Joshua Seachris (2009, 2016, n.d.) による批判は〈物語主義の検討に必要な限りで人生の意味概念を整理する〉という本項の目的にとっても無視できないものなので、簡単にここで確認しておこう。

Seachris によれば、〈人生の意味とは何か〉という問いには〈何が私の人生を価値あるものにするのか〉といった価値に関する側面だけでなく、〈そもそも人生に価値があるとはどういうことか〉といった分からないことを分かりたいと思う側面、すなわち〈理解可能性 intelligibility〉に関する側面もある。そのため、人生の意味の研究においてはこの両面を扱うことができる方法論を採用すべきだが、現状標準的とされている Metz 的なアプローチは価値的な側面のみに焦点化しているため、片手落ちの誇りを免れない。このように人生の意味の標準的見解を批判した上で、Seachris はキリスト教的な物語によって人生の意味を両面ともうまく説明できるという物語主義的見解を提案するが、その内容の確認は本項の目的から逸れるため省略する。以上が Seachris の議論の概要だ^{*8}。

ここで、人生の意味を価値として扱う Metz 的なアプローチと、理解可能性の側面をも強調する Seachris 的な路線のどちらを採用すべきか、ということが問題になる。これは人生の意味の本性を巡る主要な論争点の一つであり (cf. Landau 2021; Metz 2022)、決着のためにはさらなる議論の蓄積が必要だ。そこで、以下では Metz 的なアプローチが必ずしも Seachris の議論と背馳するわけではないことを示して、これまで見

^{*7} Metz と Kauppinen は、自分ではなく他人の人生の意味を担う行為に対して適切な情動についても論じている。そのような情動が存在すると主張するためには、〈自分ではない他人の人生の意味を評価することができる〉という第四の特徴づけを前提しなければならないように思われるが (cf. Metz 2013: 63)、Kauppinen はともかく de Bres がこの特徴づけに同意するかは疑わしい。また、この特徴づけを認めるべきかという問題と物語主義はもっともらしいかという問題は、それぞれ独立に検討可能だ。そのため、本稿では他人の人生の意味の評価については (少なくとも主観的には) 扱わない。

^{*8} 主に Seachris (2016) を参考にまとめた。

てきた特徴づけに見込みがないとは言えないと主張するにとどめたい。まず、Seachris の議論が Metz 的なアプローチに対する批判となるためには、〈人生の意味を価値としてのみ扱えば、その理解可能性の側面を捉え損なうことになる〉という主張が前提されていなければならないだろう。しかし、これは必ずしも自明ではない。なぜなら、第4節で見るように〈主体が自分の人生について理解することを通じて、個人的価値としての《人生の意味》が増す〉と考えることは可能だからだ。それでもなお Seachris が価値的なアプローチを批判するためには、このように価値と関係するわけではない〈理解可能性〉というものがあることを示した上で、その〈理解可能性〉こそが人生の意味と概念的に結びついているのだ、と言わなければならないだろう。しかし、それは強すぎる主張だと考える点で私は Metz (2022: 35-7) に同意する。以上より、本項で見た三つの特徴づけをもって〈人生の意味とは何か〉という問いに対する暫定的な回答とすることは、見込みのないアプローチであるとは言えないはずだ。以下では、このアプローチを前提に論を進めていく。

ここまで、物語主義の説明項である〈物語〉と、被説明項である〈人生の意味〉という概念について整理してきた。それを踏まえて、物語主義の主張を定式化しておこう。

物語主義テーゼ

何かしらの意味での物語が、主体の人生の意味に貢献する。

この物語主義テーゼについて、2点明確にしておく。第一に、2.1 での議論を踏まえると、この「物語」は3通りの意味に解釈できる。すなわち、表象されるものである一連の出来事としての〈ストーリー〉、ストーリーを表象する行為である〈語り〉、そしてストーリーの表象それ自体としての〈物語〉だ。そのため、どの意味での「物語」を説明項としているのかによって、物語主義は理論上三つに分けることができると考えられる。ストーリー／語り／物語を説明項に据える理論を、それぞれストーリー説／語り説／物語説と呼ぶことにしよう。

第二の点は、「貢献する」という表現についてだ。これは〈説明項の条件を満たす程度に応じて、被説明項の程度も増す〉という意味でしばしば価値論者が使う表現である。ただし、これが〈説明項と被説明項とが必要十分条件の関係にある〉ことまで含意するかは、論者によって異なるように思われる。たとえば、(第3節で見る Kauppinen のように) 人生の意味が物語主義によって説明されるものに尽きると考える場合、説明項と被説明項は必要十分条件の関係にあるとされるだろうが、(第4節で見る de Bres のように) 物語主義によって説明されるもの以外にも人生の意味は可能だと考えるのであれば、「貢献する」の中にそのニュアンスは含まれない。そこで、本稿では〈説明項の条件を満たす程度に応じて、被説明項の程度も増す〉という意味に限定して「貢献する」という表現を使うことにする。

以上のことを踏まえて、次節以降では既存の物語主義を分類し、その内容を確認・評価していく。その前に、そもそも物語概念によって(人生の意味を含む)価値を説明しようとする試み自体を疑問視する議論として、Strawson の反物語主義を次項で検討しておきたい。そうすることで、反物語主義者からの批判に応えられる理論であるための要件を明らかにできると考えられるからだ。

2.3 反物語主義

次節以降で詳しく見ていくように、何かしらの意味での物語によって価値を説明するという試みは遅くとも 1980 年代から見られ、現在も見込みのあるプロジェクトとして取り組まれている。しかし、物語主義的アプローチに見込みはないと考える論者がいないわけではなく、そうした論者としてとくに有名なのが Strawson だ。そこで、本項では Strawson の反物語主義を確認し、どのような理論であれば Strawson の批判に耐えられるかを検討する。

Strawson の反物語主義は、〈心理的物語性テーゼ the psychological Narrativity thesis〉と〈倫理的物語性テーゼ the ethical Narrativity thesis〉という二つの主張に対して向けられたものだ。心理的物語性テーゼとは「一般に、人間は自らの人生を何かしらの意味での物語として、少なくともその集合として、見たり、生きたり、経験したりする」という主張であり、倫理的物語性テーゼとは「豊かな物語として人生を経験したり理解したりすることは、良い人生であるために、真の・満ち足りた人間であるために欠かせない」という主張である (Strawson 2004: 428)。ただし、〈心理的物語性テーゼは《物語》に関連する広範な研究領域において広く合意されており、それはしばしば倫理的物語性テーゼと結びつけられて論じられる〉という Strawson の診断は実態にそぐわないように思われる。むしろ、Marya Schechtman (2011: 395, 408) が指摘するように、Strawson の直接的な批判対象は Alasdair MacIntyre や Charles Taylor などによる一部の物語主義的主張に限られると見た方が、反物語主義の焦点は明確になるだろう。そこで、まずは両者の主張を本項の議論に必要な限りで押さえる。

MacIntyre (1984=2021) と Taylor (1989=2010) は、どちらも近代についての考察を通して自己 (self) と価値との関係を分析した単著であり、それぞれの議論を簡潔にまとめることは私の手に余る。それでも、両者が心理的物語性テーゼと倫理的物語性テーゼに該当する主張を支持していることは比較的容易に確認可能だ。まず、MacIntyre (1984: 205=2021: 251-2) は近代から見られるようになった自己の概念の特徴について、「その概念とは、物語のもつ統一性のうちにその統一性が存在するような自己の概念であり、その物語は、誕生—一生—死を〈物語の始め—中間—終わり〉として連結させる」と主張する。これは、心理的物語性テーゼに該当する主張だろう。さらに、MacIntyre (1984: 218=2021: 268) によれば「『私にとっての善とは何か』を問うことは、私とその統一性を生き抜き、完成させるには、どうするのが最善か、を問うことである」。したがって、「全体としての人生が成功したか失敗したかの唯一の規準は、物語られたあるいは物語られるべき探求 [quest] の成功、失敗という規準である」(〔〕内筆者、MacIntyre 1984: 219=2021: 268) という、倫理的物語性テーゼに該当する主張が導かれる。

Taylor も、「〈探求〉として人生を見る」という MacIntyre の見解に共感を示しつつ (Taylor 1989: 17, 48=2010: 20, 57)、同様の議論を展開する。Taylor (1989: 50=2010: 59) によれば、「自分自身についての私の感覚は、成長しつつあり、成りつつある存在者についての感覚である。……成長し成る存在者として、私は、自分の成熟や後退、克服や敗北の歴史を通じてのみ、自分自身を知ることができる。私の自己理解は、必然的に時間的な深さを持ち、物語を取り込んでいる」。しかし、この心理的物語性テーゼに該当する主張が正しいとして、そこから〈統一的な物語として人生を理解することは、良い人生であるために欠

かせない」という、倫理的物語性テーゼに該当する主張が帰結するだろうか。むしろ〈子どもの頃の自分は、今の自分とは別人だった〉と言いたくなることはないだろうか。この想定反論に対して、Taylor は〈私たちの関心事について考えれば、そのような指摘には倫理的物語性テーゼを反証するだけの重みがないことが分かる〉と応答する。「私たちは、自分たちの人生が意味や重要性や実質をもち、何らかの十全さに向かって成長することを望むのである。……これは私たちの人生全体に関わることである。必要とあらば、私たちは、未来が過去を『取り返して』[redeem]ほしいと思う。過去を、意味や目的をもつ人生の物語の一部分にして、有意味な統一性の中に吸収してほしいと思う」(〔〕内筆者、Taylor 1989: 50-1=2010: 59-60)。このように、Taylor も心理的物語性テーゼと倫理的物語性テーゼに該当する主張を支持していると見ていいだろう。

以上のごく簡単なまとめでは、MacIntyre と Taylor が心理的物語性テーゼを前提に倫理的物語性テーゼを主張していることは確認できても、なぜ両者が心理的物語性テーゼを支持するのか、そこからどのようにして倫理的物語性テーゼが導出されるのかまでは確かめられない。しかし、これら二つのテーゼに対する Strawson の批判を見るためには、以上のまとめで十分である。なぜなら、Strawson の批判は両者の論証に対するものというより、〈そもそも心理的物語性テーゼはもっともらしくない〉ということ、自身の内観を根拠に指摘するものだからだ。

Strawson は、端的に〈自分は物語を通じて自分自身を理解したり、物語として人生を見たりしたことはない〉と主張する。それでは、どのように Strawson は自己の概念を理解しているのか。Strawson は、MacIntyre や Taylor が主張するように物語を通じて自分自身を捉えたことはないが、それでも自分が持続的に存在する人間であることは正しく理解できており、それで何か問題があるようには思われないと主張する。そのような自己の経験を、Strawson は MacIntyre や Taylor 流の〈物語的な自己の経験 the Narrative self-experience〉と区別して〈エピソード的な自己の経験 the Episodic self-experience〉と呼ぶ^{*9}。それでは、エピソード的な自己理解しかもたない Strawson のような主体は、正しく豊かな人生を送ることができないのだろうか。事実としてそのようなことはないのだから、心理的物語性テーゼも倫理的物語性テーゼも間違っている、と Strawson は結論する^{*10}。

以上の議論は、「何かしらの意味での物語が、主体の人生の意味に貢献する」という本稿の物語主義テーゼに対しどのような含意をもつだろうか。まず、Strawson の反物語主義は本稿における物語主義を直ちに否定するものではない。「何かしらの意味での物語が、主体の人生の意味に貢献する」ために、主体が物語的な自己の経験をもつ必要があるとは限らないからだ。そのように主張するためには、物語主義を支持する各論者がストーリー／語り／物語のうちどの意味で〈物語〉という概念を使っている、それが〈物語的な自己の経験〉とどのような関係にあるのかをまず明らかにしなければならないはずである。他方で、Strawson の議論は〈人生が意味をもつために、主体が物語的な自己の経験をもつことを前提してはなら

^{*9} 正確に言えば、Strawson (2004: 430-2, 2007: 85-90) は物語的／非物語的／通時的／エピソード的な自己経験の四つを区別しているが、それぞれの関係は本稿の議論に関わらないため扱わない。

^{*10} 主に Strawson (2004) を参考にまとめた。なお、エピソード的な自己と倫理との関係については Strawson (2007) で、人生の意味との関係については Strawson (2022) で詳しく論じられている。

ない」という制約を物語主義テーゼに課すと考えられる。このことは、反物語主義のモチベーションを考えれば明らかになる。そもそも、Strawson は MacIntyre や Taylor のように物語的な自己の経験をもつ主体の存在を否定しているわけではない。そうではなく、〈物語概念によって何かを説明しようとする論者の多くは物語を通じて自己を理解しており、そのような主体にしか当てはまらない主張を過度に一般化しているのではないか〉という疑念を指摘することに反物語主義のポイントはあるのだ (Strawson 2004: 439)。そのため、Strawson の指摘が正しければ、主体の物語的な自己理解を前提とする物語主義的見解は、そのような主体のみが獲得できる人生の意味しか説明しない狭い理論であることになる。これを〈物語的エリート主義の問題〉と呼ぼう。

しかし、はたしてこれは無視すべきでない重要な問題なのだろうか。MacIntyre や Taylor のように自己を理解する人が多いのか、Strawson のように自己を理解する人が多いのかはまだ判然としない。なぜなら、そもそも物語的な自己の経験をもつとはどういうことなのかがまだ判然としないからだ。この点に関しては Schechtman (2007) による整理が有用なため、以下で確認しよう。

Schechtman は、物語主義者が直面する (1) 人生の物語 (life-narrative) とは何か、(2) 主体が物語をもつとはどういうことか、(3) 主体が物語をもつことにはどのような実践的含意があるのか、という三つの問いについて、それぞれ相互に関連するスペクトルの下で捉えることを提案する。〈物語的な自己の経験をもつとはどういうことなのか〉を明確にするためには (1) と (2) についてだけ確認すれば良いので、それぞれ見ていこう。

まず、(1) について、人生の物語とは、一方のスペクトルの極においては単なる連続的な出来事のリストである。スペクトルの中間においては、そこに出来事間の関係についての説明が加わる。もう一方の極において、人生の物語とは統一的なテーマをもち、余分な要素は落とされたものとして捉えられる。

次に、(2) について、一方のスペクトルの極において主体は人生の物語を意識する必要がない。スペクトルの中間においては、少なくとも主体は人生の物語を明示しようとする必要がある。もう一方の極において、主体は能動的かつ意識的に人生の物語を理解しようとしなければならない。

理論上、(1) と (2) に対するそれぞれの答えは独立に組み合わせ可能だが、自然なのはスペクトルの強度を揃えた見解だろう。そのため、(1) と (2) の問いに対しては少なくとも弱い／中程度の／強い物語主義的回答が可能であることになる (Schechtman 2007: 159-61)。

以上の整理を踏まえると、MacIntyre や Taylor 流の〈物語的な自己の経験をもつとはどういうことなのか〉という問いに対しては、強い物語主義的回答が自然であるように思われる。すなわち、それは〈自覚的に自分の人生を統一的なテーマをもつ物語として表象する〉ということだ。このことを〈自己物語をもつ〉と表現しよう。以上の明確化によって、「MacIntyre や Taylor のように自己を理解する人が多いのか、Strawson のように自己を理解する人が多いのか」というさきほどの問いに一応の答えを与えられるようになったと考えられる。厳密な答えを得るためにはさらなる問いの明確化と実証的な調査が必要だが、多くの人が〈自覚的に自分の人生を統一的なテーマをもつ物語として表象する〉かは疑わしいと考える点で、私

は Strawson に共感を覚える^{*11}。少なくとも、私は自己物語をもったことはない。以上より、本稿では物語的エリート主義の問題を物語主義者が無視すべきでない重要な問題として扱う。

ここまでの議論をまとめる。Strawson の議論は物語主義のプロジェクトを否定するわけではないが、主体が自己物語をもつことを前提する物語主義的見解に対して物語的エリート主義の問題を突きつけるものだ。そのため、Strawson の反物語主義からは、物語主義テーゼに対する〈人生が意味をもつために、主体が自己物語をもつことを前提してはならない〉という制約が帰結すると私は考える。

以上で、物語主義的見解が反物語主義者からの批判に応えられる理論であるために満たすべき制約を明らかにすることができた。いよいよ、次節から既存の物語主義について検討していく。議論を先取りすると、既存の主要な物語主義はストーリー説と語り説に分類されるが、いずれも克服されるべき課題を抱えていると評価される。それを踏まえて、物語説に分類されるより有望な見解を最終的に提案しよう。

3 ストーリー説

本節と次節で、既存の主要な物語主義の主張を確認・評価していく。まず、本節ではストーリー説に分類される物語主義について見る。3.1 でその主張を確認したあと、3.2 でそれに対する評価を示そう。

3.1 ストーリー説の主張

人生の意味を含む個人的価値におけるストーリーの貢献を強調したのは、David Velleman (1991) と Kauppinen (2012, 2013, 2015, 2024) である。両者は共に、〈ある一定期間の人生の価値は、その期間を占める一連の出来事の価値の総和には還元されない〉という考えを、ストーリーの観点から説明しようとした。そのモチベーションは以下のようなものだ。快楽説の伝統に従い、ある一定期間の人生の価値は、その期間を占める一連の出来事において主体が経験した幸福の総和だと考えよう。すると、次のような二つの人生を想定することができる。一方は、(たとえば恵まれない家庭に生まれたために) 幼少期は幸福の量が少なかったが、年を取るごとに成功を重ねて幸福の量が増えていった人生であり、もう一方は、(たとえば裕福な家庭に生まれたために) 幼少期は幸福の量が多かったものの、失敗ばかりが続き幸福の量が減っていった人生だ。快楽説的に考えると、もしこれら二つの人生において主体が生涯に経験した幸福の総和が等しければ、人生の価値の点で両者に違いはないことになるはずだが、実際には私たちはそのように考えないだろう。どちらか一方の人生を選べと言われたら、私たちの多くは下り坂の人生ではなく、上り坂の人生を選ぶはずだ。だとすれば、一定期間の人生の価値はその期間を占める時点的な価値 (i.e. 幸福) の総和には還元されず、何か他の要因によって説明されなければならない。それは、一連の出来

^{*11} Strawson および Schechtman の議論の意図について、補足しておく。先述の整理を踏まえて、Schechtman (2007: 161) は Strawson の議論を〈弱い物語主義的回答は些末であり、強い物語主義的回答は危険である〉と指摘するものとして捉えた上で、中程度の物語主義的回答を擁護する議論を展開する。これに対し、私は第 5 節で Peter Goldie による〈物語〉の特徴づけに従い、弱い物語主義的回答を踏まえた見解を提示するつもりだ。そのため、ここまでの議論が正しいとしても、Strawson と Schechtman はその見解に対し〈それを《物語》と呼ぶポイントはあるのか〉と批判すると思われる (cf. Strawson 2004: 439, 2020: 139, 2022: 81)。この批判に対しては、5.1 で(部分的に)応答する。

事としての人生、すなわちストーリーが上り坂であったり下り坂であったりするという〈形状 shape〉の問題ではないか、というのがストーリー説の発想である*12。

それでは、どのようなストーリーの形状が人生の価値に貢献するのか。Velleman はこれを個人的価値一般の問題として扱うのに対し、Kauppinen は快樂説的な幸福とは区別される人生の意味の問題として捉える。本稿の関心は人生の意味にあるので、以下では Kauppinen の議論に焦点化してストーリー説の主張を確認していこう。

2.2 で見たように、Kauppinen は適切な情動の観点から人生の意味を分析する。人生の意味は、誇りや充足感などの情動を適切にするものとして捉えられるのだった。それでは、どのようなときに私たちはそのような情動を感じるだろうか。この点について、Kauppinen は MacIntyre を引きつつ、それは何かしらの目的のために苦難を乗り越えていく物語の主人公として自分を見ることができるときだと考える。以上の考察を、Kauppinen はさきほど見たストーリー説を動機づける発想と結びつける。その発想とは〈快樂説的な幸福には還元されないような人生の価値、すなわち人生の意味はストーリーの形状によって説明される〉というものだった。Kauppinen の考えでは、この〈ストーリーの形状〉は物語の主人公のストーリーを特徴づける形状として分析することができる。だとすれば、その分析には文学的な物語論 (narratology) の知見を流用することが可能だ。物語論において、物語の構造は主人公が追求する目的やその仕方、成功の見込み、より長期的な目的との関わりなどの観点から分析される。そのため、ストーリー説が注目するストーリーの形状——これを Kauppinen は〈物語的形状 narrative shape〉と呼ぶ——も、同様の観点から分析可能はずだと Kauppinen は考える (Kauppinen 2012: 357-60)。

ただし、ストーリー説の関心の対象はあくまでも現実のストーリーであって、物語論のようにフィクショナルな物語ではない。そこで、Kauppinen は有意味だと目される典型的な人生をデータとして取り上げ、それと物語論との反照的均衡によって理論を洗練させるという方針を取る。そうした典型例として Kauppinen が注目するのは、キング牧師の人生だ*13。Kauppinen によれば、キング牧師の人生は物語論的に重要な三つの特徴を備えており、それらによって特徴づけられる物語的形状が人生の意味への貢献を果たす。第一に、主体の一連の行為の目的には、客観的(または間主観的)な価値がある。たしかに、キング牧師がめざした人種差別の撤廃という目的には何かしらの客観的(または間主観的)な価値があるということは、多くの人が認めるだろう。第二に、主体はその目的を他人ではなく自分が追求すべきものとして受け入れ、そのために自分もつ能力を発揮する。キング牧師が率いたモンゴメリー・バス・ボイコット運動の困難を考えれば、キング牧師が能動的に、かつ自分の力を振り絞って活動したこともまた明らかだろう。第三に、その目的には達成の見込みがあり、たとえ達成できなくても、その過程は主体に肯定的な変化をもたらす。

*12 主に Velleman (1991: 49-50) と Kauppinen (2012: 347-9) を参考にまとめた。なお、両者はストーリー説の発想を共有するものの、形状 (i.e. 出来事間の関係) それ自体が内在的に価値をもつと考えるか否かという点で意見を異にする (cf. Dorsey 2015: 313)。この点は、一定期間の人生の価値とその期間を占める時点的な価値との関係をより厳密に考える上で重要だが、本稿の関心からは逸れるためこれ以上扱わない。

*13 キング牧師やピカソのような歴史的偉人の人生を有意味な人生の典型として取り上げ分析するというアプローチは、Metz を含め広く受け入れられている一方で、その問題点も多く指摘されている。この点に関しては、村山達也 (2023: 7-14) などを参照のこと。

周知の通り、モンゴメリー・バス・ボイコット運動は一定の成功を収めたが、〈結果が活動のもつ個人的価値のすべてだ〉という考えはもってもらしくないと Kauppinen は主張する。その過程における運動の指導者としての成長にも、キング牧師にとっての価値はあったと考えられるからだ (Kauppinen 2012: 360-5)。

以上の分析を踏まえて、人生は目的の観点から整合的であるほど意味を増すと Kauppinen (2012: 368) は結論する。この見解を、本稿の用語法によって次のように定式化しておこう。

ストーリー説

目的の観点から見たストーリーの整合性が、主体の人生の意味に貢献する。

ストーリー説について、1 点補足しておく。たとえば、物語的形状の第二の特徴において「主体はその目的を他人ではなく自分が追求すべきものとして受け入れ」といった主観的な態度に言及しているように、Kauppinen は〈人生の意味とは客観的な価値であり、主観的な態度なしに獲得可能だ〉という客観主義でも、〈人生の意味は主観的な態度のみによって手に入れることができる〉という主観主義でもなく、〈人生の意味は客観的な価値だが、それを得るためには主観的な態度も必要だ〉というハイブリッド主義に立っているように読める (cf. Kauppinen 2012: 357)。しかし、その後 Kauppinen は客観主義へのコミットメントを明確にしている (e.g. Kauppinen 2013: 166)。こうした立場の揺らぎは〈ストーリーが整合的であるために、主観的な態度は必要か〉という問題として理解できる。本稿はこの問題には踏み込まず、ストーリー説をハイブリッド主義的な解釈と客観主義的な解釈の両方を許すものとして扱うことにする。

ここまで、ストーリー説の主張を確認してきた。以下では項をあらためて、ストーリー説が物語主義として成功しているかを評価する。

3.2 ストーリー説の評価

まず、ストーリー説の学術的意義を押さえておく。ストーリー説を動機づける〈人生の価値には時点的な価値に還元できないものがあり、それは何かしらの意味での物語によって説明される〉という発想は Velleman のオリジナルではなく、Velleman (1991: 72 n. 7) 自身も認めるように MacIntyre や Taylor、Robert Nozick (1989=2024 ch. 10) などの影響を受けたものだ。しかし、それらはあくまでも単著の中で展開されたアイデアであって、そこに実質的な論証を与えたという点で Velleman と Kauppinen は高く評価されるべきだろう。

さらに、MacIntyre や Taylor による元々の議論に対して向けられる物語的エリート主義の問題も、ストーリー説はうまく回避しているように思われる。先述の通り、ストーリー説はハイブリッド主義の見解としても客観主義の見解としても解釈できるのであった。まず、ハイブリッド主義的に解釈した場合、ストーリー説が物語的エリート主義の問題を抱えるかは、それが必要とする主観的な態度が自己物語をもつことを前提とするかに依る。ハイブリッド主義的ストーリー説が必要とする態度がどのようなものかについては明確化の余地があるが、私の理解では、それは活動に対し能動的に関与するという態度であって (Kauppinen 2012: 357; cf. Wolf 2014a)、そのために自己物語をもつ、すなわち〈自覚的に自分の人生を統一的なテ

ーマをもつ物語として表象する)必要はないように思われる。だとすれば、ハイブリッド主義的ストーリー説は物語的エリート主義の問題を抱えない。客観主義的ストーリー説についても、主観的な態度を必要としない以上自己物語をもつ必要もなく、したがって物語的エリート主義の問題は当てはまらないと考えていいだろう。以上より、ストーリー説は 1980 年代に提示された物語主義的発想に実質的な論証を与えるだけでなく、それらに対して指摘される物語的エリート主義の問題も回避している点で高く評価されるべき物語主義的見解だ。

しかし、ストーリー説はそのままでは受け入れ難い課題も抱えていると私は考える。以下では、ハイブリッド主義的ストーリー説と客観主義的ストーリー説のそれぞれに指摘される問題点を順に見ていこう。

ハイブリッド主義的に解釈されるストーリー説に対しては、de Bres と Amy Berg による批判が見られる。まず、de Bres によれば、ストーリー説は主体の長期的な目的の追求によっては説明できない人生の意味を排除してしまう。de Bres (2018: 553) が例に挙げるのは、何かしらの大きなプロジェクトを追い求めるよりも、家族や友人との関係を優先するような人生だ。たしかに、人種差別の撤廃といった長期的な目的を追求することがまったくなかったとしても、そのような人生には意味がないとまでは言えないように思われる。だとすれば、Kauppinen はストーリー説が人生の意味の説明として不足していることを認めるか、どうにかして de Bres の批判に応えるかしなければならぬ^{*14}。このようにハイブリッド主義的見解は有意味に思われる活動の一部を排除してしまうという批判を、Jens Johansson と Frans Svensson (2022: 50) は〈エリート主義の問題 the elitist problem〉と呼ぶ。しかし、この呼称では物語的エリート主義の問題との混同を招くため、本稿ではこれを〈社会的エリート主義の問題〉と呼ぶことにしよう。

一方、Berg の批判は人生の意味の外延というよりは認識に関わるものである。Berg は、ストーリーの整合性を活動の指針にするとむしろ人生の意味を損なう可能性を指摘する。Berg が挙げる、次のような教師の事例を考えてみよう。その教師は学校外で地域貢献活動をしたいと思い、家庭教師をするか炊き出しに参加するかで迷っている。ここで、もし自身のストーリーの整合性を活動の指針とするのであれば、この教師は炊き出しではなく家庭教師を選んだ方が人生の意味が増すと考えられる。しかし、本当にそうだろうか。そのような選択の仕方は人生から多様性や新規性を失わせ、むしろ人生の意味を損なうことになりかねない。以上が正しければ、ストーリー説はせいぜい人生の意味についての形而上学的な説明を与えるに過ぎず、実践的な役には立たないことになる (Berg 2023: 643-5)。このようにストーリー説は活動の指針を説明できないという批判を、本稿では〈指針の問題〉と呼ぼう。

Berg の批判に対し、Kauppinen (2024) は以下のように応答している。まず、Kauppinen は〈ストーリーの整合性を活動の指針とすることには問題がある〉という Berg の指摘を認める。しかし、Kauppinen によるとそれはストーリー説の瑕疵ではない。なぜなら、ストーリー説は人生の意味についての理論であり、人生の意味をもたらす活動の指針についての理論ではないからだ。他方で、Kauppinen は自説と親和的な活動の指針の理論を説明する責任も認める。それでは、ストーリー説の下で活動の指針はどのように説明されるのか。Kauppinen によれば、人生の意味をもたらすのは、目的の観点からストーリーを整合的にすると

^{*14} のちに Kauppinen (2021) は、育児や交友、組織経営といった一見目的がないように思われる活動の価値を擁護している。しかし、ストーリー説の観点からそうした活動の価値を擁護しているわけではないため、本稿では扱わない。

主体が**信じる**活動ではなく、**実際に**ストーリーを整合的にする活動だ。したがって、前者ではなく後者に対する感受性が活動の指針には要請されると Kauppinen は主張する (Kauppinen 2024: 1515-6)。

以上の議論が Berg の批判に対する応答になっているかという問題については、ここでは扱わない^{*15}。ここで重要なのは、Kauppinen の議論が指針の問題への応答になっているとすれば、それはストーリー説のハイブリッド主義的解釈ではなく客観主義的解釈を要請すると思われるということだ。なぜなら、〈活動が人生の意味をもたらすために主体がそう信じる必要はない〉という活動の指針に関する Kauppinen の見解は、〈人生の意味を得るために主観的な態度は必要ない〉という主張を前提すると思われるが、そうだとすればそれはハイブリッド主義と両立しないからである。そこで、以下ではストーリー説を客観主義的に解釈することで指針の問題を解決できるとしても、なお残される課題を確認する。

まず、ストーリー説を客観主義的に解釈したとしても、社会的エリート主義の問題は手つかずのまま残るだろう。それだけでなく、客観主義に立つことでストーリー説は de Bres が指摘するもう一つの問題も引き入れることになる。それは次のような問題だ。3.1 でも確認したように、ストーリー説を客観主義的に読むということは、ストーリーが整合的であるために主体の主観的な態度は必要ないと考ええるということであった。だとすれば、整合性とは一連の出来事の中に成立する客観的な関係——典型的には因果関係——であることになる。しかし、人生の意味の担い手でもない、因果関係という客観的なものが主体の人生の意味に貢献するとはどういうことだろうか。たとえば、アマゾンでの短期留学がきっかけとなって環境 NGO に入り、やがてそのリーダーとなった人がいるとしよう。この人の人生の意味について、〈個々の出来事が人生の意味をもち、それらが因果関係によって結ばれている〉という説明は自然だが、〈因果関係それ自体が人生の意味に貢献する〉という説明は不自然だと de Bres は指摘する (de Bres 2018: 552-3)。このように、主体との主観的な繋がりを欠くものがなぜ主体にとっての価値を増すのか、という客観主義に対して向けられる批判を、Johansson & Svensson (2022: 46) に倣い〈繋がりの欠如の問題 the lack of connection problem〉と呼ぼう^{*16}。

ここまでの議論を整理する。ストーリー説は、ハイブリッド主義的な解釈と客観主義的な解釈の両方を許すのであった。しかし、前者で解釈すれば社会的エリート主義の問題と指針の問題が、後方で解釈しても同じく社会的エリート主義の問題と繋がりの欠如の問題が残る。したがって、ストーリー説は少なくとも 1980 年代から示唆されてきた物語主義的発想を、物語的エリート主義の問題を回避しつつうまく言葉に

^{*15} Kauppinen の議論が Berg の批判に対する応答となるためには、ストーリーの整合性に対する感受性の涵養が現実可能であることを示す必要があるだろう。しかし、この点について Kauppinen は何も述べていない。したがって、Kauppinen の議論は Berg の批判に対する応答にはなっていないと私は考える。この問題に関しては、Kauppinen (2024: 1516 n. 5) も参照のこと。

^{*16} 繋がりの欠如の問題は、人生の意味という**個人的価値**の客観主義に対して向けられる批判であることを明確しておく。de Bres の事例で言えば、この批判は環境 NGO での活動がたとえば道徳的価値をもつことを否定するわけではない。環境 NGO のリーダーが、その活動に一切肯定的な態度を向けていないとしよう。客観主義的ストーリー説が正しいとすれば、そのように主体と活動との間に主観的な繋がりがなくても、環境 NGO での活動がアマゾンでの短期留学と因果関係によって結ばれているというだけで、それは人生の意味という**個人的価値**をもつことになる。しかし、仮に環境 NGO での活動が主観的な態度にかかわらずたとえば道徳的価値をもつとしても、それが**主体にとっての価値**をもつことにはならないはずだ、ということがこの問題では指摘されているのだ。

した見解ではあるものの、そのまま受け入れることはできないと私は評価する。

だからといって、他の物語主義的見解まで見込みがない、ということにはならない。次節では、ストーリー説の対案として提出された語り説について検討する。

4 語り説

4.1 語り説の主張

個人的価値について、ストーリーではなく語りが果たす役割に注目したのは Connie Rosati (2013) と de Bres である。Rosati は Velleman と同様に個人的価値一般について論じていること、de Bres は主題を人生の意味に限定した上で、その Rosati と前節で扱った Kauppinen を批判的に乗り越えるべく議論を展開していることから、以下では de Bres (2018) に焦点化して語り説の主張を確認していく。

参照こそされていないが、de Bres の議論は 2.2 で見た Seachris とある意味で軌を一にするものだ。すなわち、de Bres も Seachris と同様に人生の意味を理解可能性と関わりが深いものとして捉え、物語概念によってそれを説明できると考える。ただし、理解可能性は価値と独立のものではなく、むしろそれをもたらすものだと考える点で、de Bres と Seachris は意見を異にする。以下で詳しく見ていこう。

まず、de Bres は理解可能性の観点から物語概念を分析する。de Bres によれば、物語は理解可能性に関わる三つの典型的な特徴をもつ。第一に、特定の人物・出来事・場面を選んで表象するという点で、物語には選択性 (selectivity) がある。第二に、それぞれ異なる出来事が因果関係や関連性によって結ばれ、全体として整合的になるよう紡がれるという点で、物語は統一性 (unity) をもつ。第三に、多くの物語は〈日常→困難→進展→危機→解決→結末〉といった構造をもち、過去の物語と共通のテーマやモチーフを扱うという点で同型 (isomorphic) だ。つまり、物語は理解の妨げとなる余分な情報を落とし、個々の要素をより大きな文脈へと位置づけ、慣れ親しんできた過去の物語と似た形になるよう整えることでストーリーの理解可能性に寄与するのであり、それは人生を主題とする物語においても同様だと de Bres は主張する (de Bres 2018: 556-8) ^{*17}。

それでは、なぜ物語によって人生が理解可能になることで、人生の意味がもたらされるのか。de Bres はこのことを理解可能性がもたらす 2 種類の価値、すなわち理解 (understanding) の価値と共同体 (community) の価値によって説明する。まずは理解の価値から確認しよう。しばしば認識論において指摘される通り、何かを理解するということはそれについての知識を得ることにとどまらないように思われる (cf. Grimm 2012)。だとすれば、理解の価値も知識がもつ認識的価値にとどまらないだろう。そのような認識的価値に還元されない理解の価値として、de Bres は関心事を予測・制御できるようになるという実践的価

^{*17} de Bres による物語の特徴づけは、本稿が 2.1 で採用したそれと背馳するわけではない。2.1 において、「物語とは一連の出来事の表象であり、典型的にはその出来事間に時間的前後関係や因果関係が見られるようなものだ」と述べた。de Bres (2018: 547-8) も同様に物語を一連の出来事の表象として捉えた上で、その典型的な特徴として選択性・統一性・同型性に注目していると考えられる。

値と、分かりたいと思っていたことが分かることで生じる充足感がもつ主観的価値を指摘する。つまり、de Bresによれば、主体は自分の人生を理解可能にする物語を語ることで、認識的価値だけでなく実践的価値と主観的価値も含む理解の価値を得るのだ(de Bres 2018: 558-60)。

続いて、共同体の価値について確認しよう。理解の価値は人生が自分にとって理解可能になることに関する価値であったのに対し、共同体の価値は人生が他人にとって理解可能になることに関する価値である。そもそも、なぜ私たちは自分の人生について語るのだろうか^{*18}。具体的な目的は様々だろうが、その中心的な理由は〈私は世界に独りぼっちだ〉〈私のこの感じは、他の誰も経験することができない〉という感覚を和らげるためだと de Bres は考える。その上で、この実存的な孤独は語りによって二通りの仕方で癒されると de Bres は主張する。第一に、語りによって自分の人生が他人にとって理解可能になることで、主体は理解してほしい人に自分の人生を理解してもらえるようになる。第二に、たとえ現実には誰かに理解してもらえなくても、語りを通じて自分の人生の物語と他人の人生の物語との同型性に気づくことで、主体は自分の経験が他人とまったく異なるわけではないと思えるようになる。このように、共同体の価値とは語りによって人生が自分だけでなく他人にとっても理解可能になることでもたらされる、社会的な価値である(de Bres 2018: 560-1)。

以上二つの価値がなぜ人生の意味と言えるのかについて de Bres はほとんど説明していないが^{*19}、たしかにこれらは 2.2 で見た人生の意味の三つの特徴をもつように思われる。第一に、主体は語りによって自分の人生を理解可能にすることで理解と共同体の価値を得るわけだから、それらを担うのは語りという行為である^{*20}。第二に、理解と共同体の価値は主体にとっての価値であり、かつ快樂の同義語としての幸福とは異なる価値だと考えられる。先述の通り、多くの場合人生の物語には困難や危機のエピソードが含まれるし、その語りの背景には実存的な孤独がある。そのため、語りは快樂よりむしろ苦痛を伴うことの方が多はずだ。それでも、主体は自分の人生を理解するため、そして実存的な孤独を癒すために人生を語るわけだから、理解の価値と共同体の価値は個人的価値だと言える。第三の特徴についても、人生の意味に対して適切な情動を Kauppinen のように広く誇り・充足感・喜び・希望・高揚感などを含むものとして考えるのであれば、理解と共同体の価値もその観点から分析できるだろう。理解の価値は「分かりたいと思っていたことが分かることで生じる充足感」を伴うものとして分析されていたし、実存的な孤独が和らぐことの価値も、たとえば〈私のこの感じは、誰にも理解されないものではない〉といった喜び・希望にふさわし

^{*18} ここで言う〈語り〉とは、2.1 で確認した通り「ストーリーを表象する行為」のことだ。そのため、de Bres (2018: 552) も認めるように、ここでの〈語り〉は必ずしも話すことである必要はなく、書いたり考えたりすることであっても構わない。

^{*19} 理解の価値が人生の意味であることは Kauppinen や Metz も認めるだろうし、共同体の価値が人生の意味であることはほとんど説明を要さない、と de Bres (2018: 560-1) は述べている。

^{*20} 「語り説論者は、[人生を構成する出来事間の]関係それ自体ではなく、関係についての語りが意味をもたらすと主張する」(□内筆者、de Bres 2018: 545)。ただし、語りが人生の意味を担うと言えるかについては疑義がある(以下の点は査読者からの指摘による。ここに記して謝意を表する)。理解と共同体の価値はあくまでも人生を構成する出来事の側が(言わば潜在的に)担う性質であり、語りはそれらを顕在化させる役割しか果たさない、という解釈も可能だからだ(cf. de Bres 2018: 552-3)。しかし、仮にこの解釈が正しいとしてもここでの議論には影響しないと私は考える。なぜなら、理解と共同体の価値を担うのが語りという行為であれ、語りの対象となる(人生を構成する)出来事であれ、「担い手は(基本的には)主体の行為だ」という人生の意味であるための第一の特徴は問題なく満たされるからだ。

いものという観点から分析できると考えられるからである。以上より、語りによって人生が理解可能になることでもたらされる理解と共同体の価値は、本稿の基準においてもたしかに人生の意味だと言える。この見解を、本稿の用語法によって定式化しておこう。

語り説

語りによって人生が理解可能になり、そのためにもたらされる理解と共同体の価値が、主体の人生の意味に貢献する。

以下では、項をあらためてこの語り説を評価していく。

4.2 語り説の評価

まず、語り説が人生の〈理解可能性〉によって人生の意味を説明することは注目に値する。2.2 でも見たように、主に Seachris によって、人生の意味への標準的なアプローチはその理解可能性の側面を見落としていると批判されてきたのだった。語り説は、その理解可能性の側面を人生の意味への標準的な、すなわち価値的なアプローチの俎上に載せたという点で高く評価されるべきだと私は考える^{*21}。

続いて、ストーリー説に対する語り説の優位性を確認しよう。語り説は、de Bres がストーリー説に対して指摘した二つの問題、すなわち社会的エリート主義の問題と繋がり の欠如の問題を克服した物語主義的見解である。第一に、語り説はストーリー説と異なり、何かしら大きなプロジェクトを追求するというわけではない人生がもつ意味を排除しない。たとえ客観的(または間主観的)な価値をもつ目的を長期的に追求する人生ではなくても、主体はその人生を理解可能にする語りによってそこに意味を見出すことができる、と語り説であれば説明可能だ。第二に、語り説によれば、主体は(明確にそう意識しているかはさておき)自分の人生を深く理解したくて、あるいは実存的な孤独を和らげたくて自分の人生について語るわけだから、そのように主体と主観的な繋がりをもつ行為が人生の意味をもたらすことに不思議はない。したがって、語り説は繋がり の欠如の問題も回避している。このように、語り説はストーリー説が抱える二つの問題を乗り越えているという点でも評価されるべき見解だ。

それでは、語り説に問題はないのだろうか。以下では、語り説が抱えるように思われる二つの問題を取り上げ、検討しよう。

第一に、語り説は主体の語りを重視することでストーリー説の課題を克服した代わりに、ストーリー説が回避できていた物語的エリート主義の問題を引き込むように思われる。自分の人生について「理解の妨げとなる余分な情報を落とし、個々の要素をより大きな文脈へと位置づけ、慣れ親しんできた過去の物語と似た形になるよう整える」物語を語るということは、〈自覚的に自分の人生を統一的なテーマをもつ物語として表象する〉ことに他ならないと考えられるからだ。

第二に、語り説はストーリー説と同様に指針の問題も免れないように思われる。ただし、このことは物語

^{*21} 2.2 で確認したように、Seachris がこの診断に同意するかは別問題だ。それでも、Metz 的なアプローチと Seachris 的なアプローチの統合の可能性を示した、という語り説の意義は損なわれないだろう。

的エリート主義の問題ほど明らかではないだろう。4.1 で見たように、語りによってもたらされる理解の価値には「関心事を予測・制御できるようになるという実践的価値」が含まれるのであった。そのため、語りによってどのような活動が人生の意味をもたらすかを予測・制御できるようになる、つまり語りを活動の指針にできるように思われるからである。しかし、de Bres (2018: 568-9)によれば、語りを活動の指針とすることは望ましくない帰結を招く。語り説によって説明される人生の意味を得るためには、人生を理解可能にする物語の方に合わせて活動すれば良いことになるが、そのような生き方は(3.2 においてストーリーの整合性を活動の指針とすることを Berg が批判したように)人生から偶然性や柔軟性を奪い、むしろ人生の意味を損ないかねないからだ。したがって、語り説は指針の問題も免れないと考えられる。

しかし、de Bres はこれら二つの反論を想定しており、それぞれについて以下のように再反論している。まず、物語的エリート主義の問題について、たしかに Strawson のように自己物語をもたない主体は語り説によって説明される人生の意味を獲得できない可能性があることを de Bres (2018: 570 n. 54)は認める。しかし、de Bres によるとそれは語り説の瑕疵ではない。なぜなら、語り説はあくまで物語概念に関わる人生の意味の一側面を捉える理論であり、その必要十分条件を与えることをめざすものではないからである。その上で、Strawson のように人生について語ることがほとんどない人がいるとしても、物語は私たちの関心事に深く広く関わっているだろうと de Bres は述べる(de Bres 2018: 570)。

同様に、指針の問題についても de Bres は説明責任を認めない。de Bres によれば、人生の意味を含む価値には追求することが合理的であるものとそうでないものがある。たとえば、何かしらのプロジェクトに携わることの意味・価値は前者だが、人生が理解可能になることの意味・価値は後者だ。なぜなら、理解可能性は展望的ではなく回顧的な性質だからである。したがって、人生を理解可能にする語りが活動の指針とならないことも語り説の落ち度ではない、と de Bres は主張する(de Bres 2018: 568)。

de Bres による以上の応答は、どのように評価されるべきだろうか。まず、物語的エリート主義の問題について、de Bres の応答はある意味で的を射ているが、別の意味では的を外していると私は考える。たしかに、語り説が物語的な自己理解を前提とする一方で、Strawson のように自己物語をもたない主体が存在する以上、そのような主体が語り説によって説明される人生の意味を獲得できない可能性を認めるという de Bres の応答は的確だ。しかし、この応答と、それでも「物語は私たちの関心事に深く広く関わっているだろう」という de Bres の主張は両立し難いように思われる。2.3 で確認した通り、Strawson の反物語主義のポイントは「物語概念によって何かを説明しようとする論者の多くは物語を通じて自己を理解しており、そのような主体にしか当てはまらない主張を過度に一般化しているのではないか」という疑念を指摘することにあつた。そのため、Strawson のように自己物語をもたない主体の人生がもつ意味は排除するにもかかわらず、それでも語り説は極めて多くの人がもつ人生の意味を捉えているはずだという de Bres (2018: 568)の応答は、物語的エリート主義の問題のポイントを外している。Strawson の指摘を認める以上、物語的な自己理解を前提とする語り説は de Bres が想定する以上に狭い範囲の人生の意味しか捉えていないことも de Bres は認めるべきだろう。以上より、語り説は物語的エリート主義の謗りを免れないと私は評価する。

指針の問題に対する de Bres の応答も、同様に評価可能だ。仮に de Bres の主張が正しく、価値には追求することが合理的であるものとそうでないものがあり、語り説によって説明される人生の意味は後者で

あるために指針の問題を免れるのだとしたら、それは語り説によって説明される人生の意味の範囲が狭いからに過ぎない。そもそも、指針の問題が価値の理論に対する批判となるのは、一般に価値は追求することが合理的であるにもかかわらず (cf. Johansson & Svensson 2022: 45)、どのようにそれをめざせば良いかわからないとすれば、そのような理論は実践的な役に立たないからだろう。たしかに、追求することが合理的でない価値を説明する理論は指針の問題に対する応答責任を回避できるだろうが、そのためには理論の説明対象が価値として例外的であることを認めなければならないと考えられる。以上より、指針の問題に対する de Bres の応答からも、語り説によって説明できる人生の意味の範囲は de Bres が想定する以上に狭いという帰結が導かれると私は主張する。

ここまでの議論をまとめよう。語り説は、従来の議論においてしばしば見落とされてきた人生の意味の理解可能性の側面に光を当てた理論であり、ストーリー説が抱える社会的エリート主義の問題と繋がり欠如の問題も克服した優れた物語主義的見解である。しかし、その代償として、語り説のスコープは物語的エリートしか得ることができない範囲の人生の意味に限定されることになった。さらに、語り説は活動の指針についても説明しないため、外延的にも実践的にも不満が残る理論だと私は評価する。

それでは、これらの課題を克服した物語主義的見解は可能だろうか、それとも「物語主義者の一部はその野心を抑えるべき」(de Bres 2018: 570)なのだろうか。次節において、私は前者の野心的な道を探ってみたい。求められるのは、語り説のストーリー説に対する優位性は保存しつつも、主体が自己物語をもつことは前提とせず、さらに活動の指針も説明できるような理論である。次節では、Peter Goldie (2003, 2007a, 2009, 2012) による〈物語的思考 narrative thinking〉の理論を参考に、本稿の用語法で言うところの物語説に分類される新しい物語主義的見解を提案しよう。

5 物語説

本節では、Goldie による物語的思考の理論を説明に組み込むことで、既存の物語主義的見解が抱える課題の克服をめざす。5.1 で物語的思考の理論を人生の意味の物語主義として再構成し、5.2 でそれが既存の見解よりも優れていることを示そう。

5.1 物語説の主張

Goldie は主に情動の哲学や美学の領域において活躍した研究者であり、人生の意味の哲学者ではない。そのため、Goldie の物語的思考の理論も人生の意味とは独立のものであるが、それを物語主義として再構成することで既存の見解より有望な理論を提示できると私は考える。そこで、以下ではその主著である Goldie (2012) を主に参照しながら物語的思考の理論を確認し、それを人生の意味の理論として再構成する、という流れで議論を進める。

まずは、Goldie による〈物語〉の特徴づけを確認しよう。Goldie もこれまで見てきた物語主義者と同様に物語をストーリーの表象として捉えた上で、それがもつ三つの典型的な特徴を指摘する。すなわち、整合性、理解可能性、そして〈情動的重要性 emotional import〉である。このうち、整合性と理解可能性は〈話

題となる一連の出来事が因果関係や関連性によって結ばれ〈ストーリーについての(知識を得ることにとどまらない)理解を可能にする〉という、すでに見た物語の特徴とおおよそ同じものと考えていいだろうから^{*22}、ここでは情動的重要性についてだけ確認しよう。情動的重要性とは、ストーリーを構成する出来事をもつ、情動的に評価される価値のことである。たとえば、知人が水泳大会で優勝したという出来事について考えてみよう。その人があなたにとってとくに親しい友人であるならば、あなたはその出来事を誇らしいと評価するかもしれないし、あなたもその大会の出場者で、その人以上に努力したにもかかわらず負けてしまったのであれば、あなたはその出来事を妬ましいと評価するかもしれない。この場合、〈知人が水泳大会で優勝した〉という出来事は誇らしさ、あるいは妬ましきという情動的重要性をもつ。Goldieによれば、典型的な物語は整合性と理解可能性だけでなく、このような情動的评价の観点からも特徴づけられる^{*23}。

整合性と理解可能性はともかく、情動的重要性を物語の典型的な特徴に含めることには異論も想定されるため^{*24}、2.1 で見た「私はお腹が減っていたので、買い物に出かけた。その途中で古い友人に偶然出会い、お腹が減っているのも忘れて話し込んでしまった」という典型的な物語を例にその説得性を確認しておこう。一見、この物語は淡々と一連の出来事を語っているように見えるかもしれない。しかし、「お腹が減っているのも忘れて」という表現には、どこかその友人と会えた「私」の喜びが感じられないだろうか。あるいは、「お腹が減っているのも忘れて」のあとに「思わず」と付け加えれば、そのニュアンスはさらにはっきりするだろう。このように、すべての物語ではないにしろ典型的な物語には主体の情動的な評価の要素が含まれる、と指摘することに Goldie の分析の眼目はある^{*25}。以下では、この分析が正しいと仮定して論を進める。

Goldie の物語概念の分析は、その情動的側面に注目するという点では de Bres の分析と異なるものの、その他の点ではむしろ重なる部分が多い。細部を無視すれば、物語は整合性と理解可能性をもつという Goldie の主張と、物語は選択性・統一性・同型性によって特徴づけられ、それらがストーリーの理解可能性に寄与するという de Bres の主張は、ほとんど同じことを言っているように思われる。だとすれば、Goldie が〈物語的思考〉と呼ぶストーリーを表象する過程も de Bres の〈語り〉と似たものになるように思われるが、実際には両者は大きく異なる。その違いは様々あるが、以下では本稿の議論と深く関わる2点に絞って確認する。すなわち、物語的思考に含まれる現象の広さと、活動の指針との関わりについてである。

第一の点については、2.3 で見た(人生の)物語に関する Schechtman の議論を参考に整理すると分か

^{*22} ここでの「理解可能性」の原語は“meaningfulness”であり、これまでそう訳出してきた“intelligibility”ではない。しかし、少なくとも本稿の議論にとって両者の厳密な区別は問題にならない上、たとえば前者を「有意味性」などと訳してしまうと「人生の意味」との混同を招くため、本稿では後者と共に「理解可能性」と訳すことにする。“meaningfulness”についての詳細は Goldie (2012: 17-22)を参照のこと。

^{*23} 主に Goldie (2003, 2012: ch. 1)を参考にまとめた。なお、水泳大会の事例は Goldie (2007b: 22-3)によるものである。

^{*24} 物語と情動の関係については、Velleman (2003)や高田 (2017: 36 n. 4)なども参照のこと。

^{*25} それでは、〈友人に出会った〉という出来事をもつ喜ばしさという価値は、友人に出会ったその時点に出来事に対して帰属されるのか、それとも語りを通してストーリーを振り返ったときに帰属されるのか。Goldieによれば、物語にはこの両方の視点が重なった仕方では表れる。この点は Goldie の物語的思考の理論にとっては重要だが、本稿の関心からは逸れるためこれ以上は扱わない。詳細は Goldie (2003, 2007a, 2012: ch. 2)を参照のこと。

りやすい*²⁶。私は(1)(人生の)物語とは何か、(2)主体が物語をもつとはどういうことか、という問いをそれぞれ相互に関連するスペクトルの下で捉える Schechtman の分類に基づき、4.2において de Bres の〈語り〉はこれらの問いに対する強い物語主義的回答を必要とすると診断したのだった。この枠組みを踏襲して整理すると、Goldie の〈物語的思考〉は弱い物語主義的回答から強い物語主義的回答まですべての範囲を網羅する概念である。

まず、(1)について、整合性・理解可能性・情動的重要性によって特徴づけられる、物語であるための性質——これを Goldie は〈物語的構造 narrative structure〉と呼ぶ——を、Goldie は程度を許す性質として捉える。そのため、「たとえば、年代記(chronicle)は著しく物語的構造を欠くが、それでも年表(annal)よりは物語的であり、日記(diary)よりは物語的でないと言えるような要素をもつ」(Goldie 2012: 13)。

次に、(2)について、Goldie は無意識のうちに頭を流れる思考から意識的な熟慮まで、何かを〈心に抱くこと conceiving〉全般を物語的思考と呼ぶ。そのため、物語的思考には、通常「想像する」「思い出す」「計画する」「再現する」「熟考する」といった言葉で表現される現象も含まれる(Goldie 2012: 3-6)。

以上の整理を踏まえ、語りと物語的思考との違いをより明確にするために、〈私はお腹が減っていたので、買い物に出かけた〉という出来事について考えてみよう。実際に、私はお腹が減ったタイミングで近所のコンビニまで昼食を買いに出かけてみた。道中、何となくカレーを食べたくなかったが、残念ながらカレーは置いていなかった。いくつか弁当を手に取り眺めているうちに、麻婆豆腐丼を食べたくなかったので、それを買って帰ることにした。

いま私は議論のために私の買い物の経験を言葉にしたが、その過程において意識的・言語的に思考することは(レジでの会話を除いて)ほとんどなかったように思う。そのため、この無意識的な思考過程は、いま話題にしている一連の出来事について「理解の妨げとなる余分な情報を落とし、個々の要素をより大きな文脈へと位置づけ、慣れ親しんできた過去の物語と似た形になるよう整える」物語を語るという、de Bres が言う意味での〈語り〉とは見なせない。それでも、私の買い物の経験には弱い物語的構造を指摘することができる。たとえば、〈カレーが置いていないことを残念に思う〉という私の経験は、〈カレーを食べたいと思う〉という時間的に少し前の出来事と〈カレーが置いていないことを確認する〉というその時点の出来事とを結び(整合性)、昼食にはカレー以外の何かを選ばなければならないことを私に理解させ(理解可能性)、そのことが残念だという評価を与えた(情動的重要性)。そのため、私の無意識的な思考過程は、〈語り〉とは見なせなくても、弱い物語的構造をもつ経験を構築した〈物語的思考〉とは見なすことができる。このように、物語的思考は物語が構築される過程の無意識的で雑然とした(messy)側面も捉えようとする点で語りと異なるのだ*²⁷。

第二の違いに移ろう。4.2 で見たように、de Bres によれば語りは過去の人生を理解可能にするものであって、未来へ向ける指針にはならないのであった。しかし、Goldie によれば物語的思考は二通りの仕方で

*²⁶ Goldie と Schechtman の見解の異同については、Goldie(2012: ch. 6)を参照のこと。

*²⁷ 「物語的思考は雑然としていて精密さを欠き、あらゆる有用な区別を曖昧にしてしまう……という不満に対する正しい答えは、人生そのものが雑然としているとすれば、物語的思考も当然そうあるべきだからだ、というものだ。私たちは、人生を、心を、心をもって生きることを過度に単純化してしまいたい、という誘惑に抗わなければならない」(Goldie 2012: 173)。

活動の指針となる。Goldie が挙げるチェスの事例を見てみよう。チェスの初心者は、過去に打った一連の手について〈あれは失敗だった〉〈あそこに打っていたらどうなっていたらどうか〉といった仕方考える。一連の出来事を整合的に並べ、対局の流れを理解し、それぞれの手を評価する^{*28}という点で、これは物語的思考だ。同様にして、未来に打つ手も物語的思考を通して決定される。すなわち、〈あそこに打ったらどうなるだろう〉〈ここではどうだろうか〉といった仕方、チェスの初心者は〈枝分かれした可能性 branching possibilities〉を評価し、意思決定するのだ。ただし、ある程度チェスに習熟すると、こうした意思決定の仕方に変化が生じてくると Goldie は指摘する。すなわち、チェスの盤面について物語的思考を繰り返すことで学習が進み、初心者の頃は愚直に検討していた勝ちに繋がらない駄目な手は、そもそも〈生きた選択肢 live options〉として意識に上らなくなるというのである (Goldie 2012: 89-91) ^{*29}。

まとめよう。物語的思考は、繰り返され内面化されることで〈生きた選択肢〉のみを主体に示すようになる。その生きた選択肢が複数ある場合、主体は物語的思考を通してそれら〈枝分かれした可能性〉を評価し、どれを選べば良いかを決める。これら二通りの仕方、物語的思考は活動の指針となるのだ。

以上の議論は技能の学習についてのものだが、性格特性や徳も同様の仕方、すなわち物語的思考によって涵養されると Goldie は主張する^{*30}。本稿の議論にとって性格特性と徳の区別は重要でないため、以下ではどちらも情動的傾向性、すなわち〈もし適切な状況の下で出来事 T が生じたならば、主体は情動 E をもつ〉という反事実的条件文によって分析される性質の一種として扱う。たとえば、〈もし適切な状況の下で苦しんでいる人を見かけたら、主体はその人に同情する〉という反事実的条件文によって分析される、優しさという情動的傾向性について考えてみよう。優しさとは、先天的な要因もあるかもしれないが、過去に人を傷つけてしまった出来事を思い出して後悔し、次からはそうならないよう気をつけて振る舞うことで身に着いていくものでもあるはずだ。こうした反省と計画、すなわち物語的思考を繰り返し十分内面化した主体は、もはや誰かを傷つける行いが生きた選択肢として意識に上らなくなると Goldie は主張する。以上の議論が正しければ、たしかに物語的思考は語りとは異なり、枝分かれした可能性を情動的に評価するという仕方、また内面化された情動的傾向性として生きた選択肢を主体に示すという仕方、活動の指針となる^{*31}。

^{*28} こうした評価は、必ずしも情動的であるとは限らないだろう。だからといって、ここで挙げた事例が物語的思考ではないということにはならない。第一に、過去の手に対して悔しさや誇らしさを感じることもあるように、情動的な評価も存在することは明らかだ。第二に、仮に情動的重要性を欠くとしても、弱い物語的構造を認めることは可能である。

^{*29} 将棋棋士の羽生善治も、同様の主張をしている。「棋士は『直観』によって、まずはパッと手を絞り込むのです。……ただし、ここで言う『直観』は、決してやみくもなものではありません。あえて言葉で表現するなら、『経験や学習の集大成が瞬間的に現れたもの』です。あるいは『今、自分はどこにいてどの方向に進めばいいのか』を、大まかにつかむ『羅針盤』のようなものです。これはその棋士の、これまでの歩みやストックしているデータによって裏づけられています」(羽生 2017: 66-7)。

^{*30} このように技能と徳との連続性を強調する議論は、徳倫理学においてしばしば見られる (e.g. Annas 2011=2019 ch. 3)。

^{*31} 主に Goldie (2009, 2012: 91-7) を参考にまとめた。ただし、傾向性の分析に関しては柏端達也 (2017: 168) も参考にした。なお、活動の指針に関する Goldie の議論は〈私たちは情動的・直観的な仕方によってのみ意思決定する〉とか〈私たちは理性的・熟慮的な仕方によっては意思決定しない〉といった主張を含意しない。その主眼は、むしろ〈私たちが理性的・熟慮的な仕方のみによって意思決定しているとすれば、悪徳な行為について熟慮せずともある程度有

ここまで、de Bres の〈語り〉との重要な違いとして、物語的思考に含まれる現象の広さと、活動の指針との関わりについて見てきた。以上の議論は人生の意味とは独立したもののだが、接続は容易に思われる。まず、物語の情動的重要性より、物語的思考は対象となる出来事がもつ主体にとっての価値、すなわち個人的価値の情動的な評価に関わる。もちろん、情動的重要性をもつあらゆる出来事が人生の意味も担うとは限らない。情動には、人生の意味とは無関係なものもあるからだ。2.2 で確認したように、Kauppinen によれば、人生の意味とは誇り・充足感・喜び・(ある種の)希望・高揚感などに対して適切な、あるいは適合的なものであった。そのため、物語的思考に伴うこれらの情動——Kauppinen (2012: 357) の言葉を借りて、以下〈物語的情動 narrative emotions〉と呼ぶ——に適合的な行為は、2.2 の特徴づけより人生の意味をもつと考えられる。

以上の議論を踏まえて、次のように定式化される物語説を新しい物語主義として提案したい。

物語説

物語的感受性に適合的な行為が、主体の人生の意味に貢献する。

物語説について、3 点明確にしておく。第一の点は、「適合的な」という表現についてだ。2.2 で確認した通り、本稿ではこれを「適切な」の同義語として扱い、適合性・適切性の本性については開いたままにしておく。ただし、物語説だけでなくストーリー説と語り説も同様に適合的な情動の観点から人生の意味を特徴づけているため、この点はストーリー説と語り説に対する物語説の短所ではなく、むしろ物語主義および人生の意味の理論全体にとっての説明課題だと見るべきだ。

第二に、ここでは「物語的感受性」という言葉を〈物語的情動を引き起こす情動的傾向性〉という意味で使っている。このことから〈人生の意味に適合的な物語的情動は、実際に生じる必要はない〉という主張が帰結する。どういうことか。再び『鬼滅の刃』を例に取ろう。炭治郎が死力を尽くしてある鬼からある人を守り切ったものの、疲労困憊でそのまま気絶してしまったとする。このとき、炭治郎には意識がないので、鬼から人を守ったことに対する誇りや充足感といった物語的情動は生じていない。それでも、心身共に健やかであるといった適切な状況の下であれば、炭治郎はこの出来事に対して誇りや充足感を抱くだろう。このように、説明項を物語的情動ではなく物語的感受性とすることで、物語説は主観主義的な理論に対してしばしば向けられる〈出来事に対して主観的な態度が向けられないとき、その価値はどのように説明されるのか〉という批判を回避することができるのだ (cf. Prinz 2007: 96-8)^{*32}。

第三に、なぜこの見解を物語説に分類するのかについて述べる。物語的思考の理論が「物語が構築される過程の無意識的で雑然とした側面も捉えようとする」ものなのであれば、その理論に基づいた見解は物語説よりむしろ語り説の一種であるように思われるかもしれない。この点は、説明項を物語的情動では

徳に振る舞える人の意思決定を説明できないことを指摘する点にある (Goldie 2009: 102-3)。

^{*32} 物語説が主観主義に分類されるかは、適合性・適切性の本性が価値の主観性・客観性とどのように関わるか次第であるが、この問題は本稿の射程を超えるため扱わない。少なくとも、物語説は〈人生の意味は主観的な態度のみによって手に入れることができる〉と考える素朴な主観主義ではないが、心から独立した価値を認めないという点で素朴な客観主義・ハイブリッド主義でもない。

なく物語的感受性とした第二の点と関わる。すなわち、物語的感受性をもつということはある意味で〈物語をもつ〉ことだと考えられるため、この見解は物語説なのだ。以下で詳しく見ていく。

先述の通り、物語的感受性とは、物語的思考が繰り返されることによって内面化された、物語的情動を引き起こす情動的傾向性である。それでは、なぜ物語的思考を繰り返すことで(適切な状況下であれば)物語的情動が引き起こされるようになるのだろうか。一つの有力な答えは、そうすることで物語的情動を信頼できる仕方で引き起こす因果的基盤が主体の脳内に備わるから、というものだろう(cf. 柏端 2017: 168-75)。だとすれば、その因果的基盤とは何か。情動の哲学者である Jesse Prinz (2007: 92-6)によれば、記憶に格納された必ずしも言語的であるとは限らない表象の集合が、(物語的情動のような)特定の情動を信頼できる仕方で引き起こす因果的基盤となる。このことを、再び優しさという情動的傾向性を例に考えてみよう。さきほどの議論によれば、〈優しさを身に着ける〉とは「過去に人を傷つけてしまった出来事を思い出して後悔し、次からはそうならないよう気をつけ」という物語的思考を繰り返し、十分内面化することだった。物語的思考は必ずしも言語的な思考である必要はないので、そのような思考が内面化されるということは、必ずしも言語的であるとは限らない表象の集合が記憶に格納されるということだと考えていいだろう。このように、物語的思考を内面化することで優しさが身に着くという主張は、〈記憶が《もし適切な状況の下で苦しんでいる人を見かけたら、主体はその人に同情する》という反応を信頼できる仕方で引き起こす〉という説明と整合的である。以上より、〈物語的感受性をもつ〉ということは、その因果的基盤となる記憶をもつということだ」という見解は(その裏づけには認知科学的な検証が必要だが)もっともらしいと私は考える。

それでは、物語的感受性をもつこと、すなわちその因果的基盤となる記憶をもつことは、〈物語をもつ〉ことだと言えるだろうか。少なくとも、これは 2.3 で見た〈自己物語をもつ〉ことではない。物語的感受性をもつために、〈自覚的に自分の人生を統一的なテーマをもつ物語として表象する〉ことは必要ないからだ。しかし、「すでに頭の中であって、初めて語られるときを待っている」ものまで〈物語〉に含める Goldie (2012: 4)の広い用法に従えば、物語的感受性をもつことは〈物語をもつ〉ことだと言えるかと私は考える。これが、本項で提案した見解を物語説に分類する理由だ*³³。

以上が本稿の提案する物語説である。次項では、この理論が既存の物語主義的見解よりも有望であることを示そう。

5.2 物語説の評価

4.2 で確認した通り、本稿が求めるのは語り説が抱える物語的エリート主義の問題と指針の問題を克服し、かつストーリー説に対する優位性も保存した理論である。順に確認していこう。

*³³ 以上が、注 11 で見た Strawson と Schechtman から向けられるだろう批判に対する応答である。〈物語〉の特徴づけによってはこの応答に対するさらなる批判も可能だろうが(cf. Fabry 2023)、これ以上この論点には踏み込まない。ここでの目的は、Goldie による物語的思考の理論を参考に既存の物語主義的見解が抱える課題を克服した理論を提案することであって、(2.1 で述べたように)多種多様な関心の下で扱われる物語概念の統一的な意味を特定することではないからである。それでも、(1) Goldie の用法に従うならば、本稿で提案した見解は物語説に分類できること、(2) 少なくとも語り説には(ストーリー説にも)分類されないこと、の 2 点は示せたはずだ。

まず、物語説は物語的エリート主義の問題を回避している。2.3 で見たように、物語主義的見解が物語的エリート主義の問題を回避するためには、〈人生が意味をもつために、主体が自己物語をもつことを前提してはならない〉という制約を満たさなければならないのだった。物語説は、この制約を問題なく満たしている。なぜなら、5.1 で確認したように、物語的感性をもつためにはその因果的基盤となる記憶をもつことができればよく、そのために自己物語をもつこと、すなわち〈自覚的に自分の人生を統一的なテーマをもつ物語として表象する〉ことは必要ないからだ。したがって、物語説は Goldie による物語的思考の理論に基づくという点で物語主義的見解でありながら、Strawson の反物語主義とも両立する。

次に、物語説は活動の指針についても説明することができる。5.1 で見たように、物語的感性は二通りの仕方での活動の指針となる。第一に、物語的感性は人生の意味を担うであろう活動を生きた選択肢として主体に示す。第二に、その生きた選択肢が複数ある場合、主体は物語的感性に照らしてそれら (i.e. 枝分かれした可能性) を情動的に評価することで、どれがもっとも意味のある活動だと考えられるかを判断できる。このようにして、物語説は指針の問題にも応答可能だ^{*34}。

以上より、物語説は語り説が抱える問題を克服可能な理論だと評価できる。続いて、ストーリー説に対する物語説の優位性を確認しよう。

3.2 で確認した通り、ストーリー説は指針の問題・繋がりへの欠如の問題・社会的エリート主義の問題を抱えており、少なくともそのすべてに答えることは難しいと考えられるのであった。これら三つの問題のうち、指針の問題に対する物語説からの応答はすでに確認した。また、繋がりへの欠如の問題も、物語的感性という主観的な性質によって人生の意味を説明する物語説には当てはまらない。

それでは、社会的エリート主義の問題についてはどうだろうか。〈適合性〉に訴えて人生の意味を説明していることが、この問題への応答を難しくしているように思われる。カミュの随筆『シーシュポスの神話』を例に考えてみよう。シーシュポスは、山頂に運んでも転がり落ちるだけの岩をひたすら押し上げ続けるという罰を神々から与えられた、ギリシア神話のキャラクターだ。一見、そのような人生には苦痛しかないように思われるが、むしろカミュはそこにシーシュポスの幸福を見出す。

シーシュポスの沈黙の喜びのいっさいがここにある。かれの運命はかれの手に属しているのだ。かれの岩はかれの持ち物なのだ。……人間が自分の生へと振向くこの微妙な瞬間に、シーシュポスは、自分の岩のほうへと戻りながら、あの相互につながりのない一連の行動が、かれ自身の運命となるのを、かれによって創りだされ、かれの記憶のまなざしのもとにひとつに結びつき、やがてはかれの死によって封印されるであろう運命と変るのを凝視しているのだ。……いまや、シーシュポスは幸福な

^{*34} この応答に対し、〈物語的感性は人生の意味を**実際**にもつ行為を示すのではなく、人生の意味をもつと主体が**信じる**行為を示すだけではないか〉という再反論があるかもしれない。物語説の立場から見れば、この再反論は〈物語的感性に適合的な行為についての指針は可能なのか〉という批判として解釈することができる。この批判に対しては、〈物語的感性と人生の意味は相互依存的な関係にあるため、《物語的感性に適合的な行為を前もって知ることは可能なのか》という批判は的外している〉と応答したい。この応答が成功しているかは適合性の理論と共に評価されるべきだが、本文の議論と合わせて、少なくとも物語説が指針の問題に応答できる見込みがあることは示せたはずだ。

のだと思わねばならぬ。(カミュ 1969: 215-7)

カミュによれば、シーシュポスの「相互につながりのない一連の行動」は「かれの記憶のまなざしのもとにひとつに結びつき」、シーシュポスに「沈黙の悦び」をもたらしている。これは、シーシュポスが物語的感受性(記憶のまなざし)によって、ひたすら岩を押し上げ続けるという活動(相互につながりのない一連の行動)に物語的情動(沈黙の悦び)を覚えるようになった、ということだと解釈していいだろう。ここで問題となるのが〈適合性〉である。シーシュポスが岩を押し上げる行為に喜びという物語的情動を実際に抱くとして、はたしてその行為はシーシュポスの喜びに対して適合的・適切なのだろうか。あなたがシーシュポスの親友だとして、「この刑罰が、むしろ自分には喜ばしい」と語るシーシュポスに対し、「目を覚ませ。君は神々によるこの仕打ちに怒るべきなのであって、喜んでいる場合ではない。それでは相手の思う壺だ」と伝えたくなるとすれば、シーシュポスの行為はその喜びに対して不適切だと考えることもできる^{*35}。実際にシーシュポスの人生に意味があるのかについての判断は読者に委ねよう^{*36}。ここで重要なのは、もし物語説がシーシュポスや私たちの視点から独立に、何かしら客観的な仕方で物語的情動の適合性・適切性を評価できると主張する見解なのであれば、それは社会的エリート主義の誇りを免れないのではないか、ということだ。

以上より、物語説がストーリー説の抱えるすべての問題に応答可能だと言えるかは、この疑念を晴らせるかに懸かっている。ただし、本稿の残りでは社会的エリート主義の問題に対する十分な応答を示すことはできない。そのためには〈適合性・適切性とは何か〉という問いに答えなければならないが、2.2 で述べたようにこれは価値論上の主要な問題の一つであり、本稿の射程を超えている。そこで、以下では Goldie による適切性の分析を確認し、それが正しいと仮定すれば物語説は社会的エリート主義の問題に応答できる、ということを示す。そうすることで、少なくとも物語説は社会的エリート主義の問題に応答できる見込みがあるとは言えるようになるからだ。

Goldie は、因果的・科学的説明と物語との違いに注目し、両者は異なる仕方で適切になると主張する。Goldie によれば、物語の適切性は因果的・科学的説明とは異なり、私たちの視点や情動から独立に評価することはできない^{*37}。このことを、Goldie は Vieda Skultans (2003) による臨床心理学的なナラティブ・アプローチを例に説明する。Skultans の研究は、ラトビアにおけるうつ病患者の語りにナラティブ・アプローチ

^{*35} この点に関しては、Susan Wolf (2014b: 118-9) も参照のこと。

^{*36} 人生の意味の哲学においては、キング牧師などの人生が有意味な人生の典型とされてきたのとは対照的に (cf. 注 13)、シーシュポスの人生は無意味な人生の典型例として扱われてきた (cf. Metz 2023)。しかし、この事例を世に広めた『シーシュポスの神話』がむしろシーシュポスの幸福——この「幸福」を快樂と同義に捉えることはカミュの眼目を外すことになるだろうから、これは人生の意味を指すと解していいだろう——を主題として書かれたことを考えれば、シーシュポスの人生は無意味であるという主張は、少なくとも自明ではないと私は考える。

^{*37} 野家も同様の主張をしている。「自然科学が『定量化数量化する手法』を先鋭化させて構築してきたのは、あらゆる人間的視点から切り離された『非人称的科学』というべきものである。それは『物語性』と『人称性』をあたう限り排除することによって、目覚ましい普遍性と客観性を獲得してきた。しかし、そうした方法を人間の心や行為の領域にまで適用することは、ヘンペルがかつて企てて挫折した『統一科学』の見果てぬ夢を追い求めることにほかならない」(野家 2005: 330)。なお、物語と因果的・科学的説明はどのような関係にあるのかという問題に関する近年の論争状況については、苗村弘太郎 (2021) などを参照のこと。

の観点から迫ったものだ。その中でも、Goldie は Ingrida という患者の事例に注目する。Ingrida は、結婚し 9 歳の娘をもつ女性だ。〈家庭も仕事もあって自分は恵まれているにもかかわらず、どうしても感情を抑えられないときがある〉ことに Ingrida は悩んでいる。たとえば、ある日 15 時間の労働を終えて夜の 11 時に帰宅したところ、皿は洗われないまま放置され、部屋も散らかっているのを見て、怒りに我を忘れてしまった。このような Ingrida の語りを、Skultans は〈長時間労働ではなく Ingrida 自身を責めている〉と分析する (Skultans 2003: 2423-4; Goldie 2012: 155-8)。

この事例に、Goldie は物語の適切性を巡る視点の対立を見て取る。まず、Goldie によれば、Ingrida の語りは自己制御に失敗した出来事についての物語的思考だ。Ingrida は、部屋が散らかっているのを見て取り乱してしまったという出来事を恥ずべきこととして振り返っている。これに対し、Skultans は Ingrida の物語を別様に評価していると Goldie は指摘する。すなわち、Goldie によれば、Skultans は〈Ingrida が怒りを抑えられなかったのはラトビアの社会的・経済的な問題であって、自己制御の問題ではないため、Ingrida の自責の念は不適切だ〉と評価している。このように、散らかった部屋を見て取り乱すという出来事に対する罪悪感 (i.e. 物語的思考に伴う情動) の適切性を巡って、Ingrida と Skultans の視点は対立していると Goldie は主張する (Goldie 2012: 158)。

以上のように、Goldie によれば物語の適切性は私たちの視点を通して評価されるものだ。ただし、ここで Goldie は〈Skultans のような聞き手の視点の方が、Ingrida のような語り手の視点よりも適切だ〉と述べているわけではない。語り手の視点と同様に、聞き手の視点もバイアスを免れている保証はないからだ。むしろ、Goldie の主眼は〈語り手による物語の評価だからといって、適切であるとは限らない〉ことを指摘する点にある。このことは、Ingrida の事例のように語り手と聞き手とが分かれているわけではなく、頭の中で主体がどちらも担う場合でも同様だ。たとえば、過去の配慮に欠けた冗談について物語的思考を働かせ、あらためてそれを可笑しく思うものの、その視点に対してさらに一步退いた視点から、それでもあれは言うべきではなかった、と後悔するような場合を考えれば良い。この場合も、一步退いた視点の方が適切であるという保証はないのだ。いずれにせよ、物語の適切性はこのように私たちの視点を通して評価され、(少なくとも典型的には) 情動がその過程に関わる。したがって、物語の適切性は私たちの視点や情動から独立に評価することはできない。以上が、物語の適切性に関する Goldie の議論だ (Goldie 2012: 159-61)。

それでは、バイアスとは何か、どうすればそれを除くことができるのか、いつになれば物語の適切性は定まるのかといったことについて、Goldie はほとんど何も述べていない。そのため、Goldie の路線で進むとしても、適切性の本性についてはさらなる議論が必要である。それでも、以下のことは言えるはずだ。Goldie の議論が正しいとすれば、物語的思考に伴う情動の適切性・適合性は私たちの視点から独立に、客観的な仕方で評価されるものではない。むしろ、それは出来事の情動的評価にバイアスがありうることを認めた上で、それでも私たちの視点から、私たちの情動に基づいて人生の意味について考えることを要請するものである。以上より、物語説が適合性に訴えて人生の意味を説明するからといって、社会的エリート主義の問題に陥るとは言えない。

本項の議論をまとめよう。物語説は、語り説が抱える物語的エリート主義の問題と指針の問題に応答可能だけでなく、ストーリー説が直面する繋がりやの欠如の問題も回避している。さらに、Goldie による適切

性の分析を踏まえれば、社会的エリート主義の問題にも応答できる見込みがある。以上より、物語説は既存の物語主義的見解よりも有望な人生の意味の理論だと本稿は結論する。

6 おわりに

〈何かしらの意味での物語が人生の意味に貢献する〉と考える物語主義のプロジェクトは少なくとも1980年代から推し進められてきたが、説明項・被説明項のどちらにも曖昧な部分が多く、論争状況の見通しが良いとは言えなかった。そこで、本稿は物語主義の説明項である〈物語〉と、被説明項である〈人生の意味〉という概念について整理した上で(第2節)、既存の見解の主張を確認・評価した。ストーリー説は物語主義的発想をうまく言葉にした理論ではあるものの、いくつかの克服困難な課題を抱えている(第3節)。語り説はそれらの課題を首尾よく乗り越えたものの、外延的にも実践的にも不満の残る理論となってしまった(第4節)。そこで、本稿はそれらの見解が抱える課題を克服できる理論として、Goldieによる物語的思考の理論を人生の意味の物語主義として再構成した物語説を提案した(第5節)。適合性・適切性の概念を現金化するという物語主義および人生の意味の理論全体にとっての説明課題は残されているものの、物語説は既存の物語主義的見解よりも有望な人生の意味の理論だと本稿は主張する。

謝辞

井頭昌彦、吉沢文武の両氏、および2名の査読者からの有益なコメントに感謝します。

参考文献

- [1] Annas, J., 2011, *Intelligent Virtue*, Oxford University Press. (相澤康隆訳、2019、『徳は知なり——幸福に生きるための倫理学』春秋社)
- [2] Berg, A., 2023, “Do Good Lives Make Good Stories?,” *Philosophical Studies*, 180: 637-59.
- [3] Casati, R. & Varzi, A., 2023, “Events,” *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Fall 2023 Edition), URL = <<https://plato.stanford.edu/archives/fall2023/entries/events/>>.
- [4] Danto, A., 1965, *Analytical Philosophy of History*, Cambridge University Press. (河本英夫訳、1989、『物語としての歴史——歴史の分析哲学』国文社)
- [5] D’Arms, J. & Jacobson, D., 2000, “Sentiment and Value,” *Ethics*, 110: 722-48.
- [6] ———, 2023, *Rational Sentimentalism*, Oxford University Press.
- [7] Davidson, D., 1980, *Essays on Actions and Events*, Oxford University Press. (服部裕幸・柴田正良訳、1990、『行為と出来事』勁草書房)
- [8] de Bres, H., 2018, “Narrative and Meaning in Life,” *Journal of Moral Philosophy*, 15: 545-71.
- [9] Dorsey, D., 2015, “The Significance of a Life’s Shape,” *Ethics*, 125: 303-30.

- [10] Fabry, R., 2023, “What Is Self-Narrative?,” *Inquiry*, doi: 10.1080/0020174X.2023.2177338.
- [11] Goldie, P., 2003, “One’s Remembered Past: Narrative Thinking, Emotion, and the External Perspective,” *Philosophical Papers*, 32: 301-19.
- [12] ———, 2007a, “Dramatic Irony, Narrative, and the External Perspective,” *Royal Institute of Philosophy Supplement*, 60: 69-84.
- [13] ———, 2007b, “Emotion,” *Philosophy Compass*, 2: 928-38.
- [14] ———, 2009, “Narrative Thinking, Emotion, and Planning,” *The Journal of Aesthetics and Art Criticism*, 67: 97-106.
- [15] ———, 2012, *The Mess Inside: Narrative, Emotion, and the Mind*, Oxford University Press.
- [16] Grimm, S., 2012, “The Value of Understanding,” *Philosophy Compass*, 7: 103-17.
- [17] Johansson, J. & Svensson, F., 2022, “Subjectivism and Objectivism about Meaning in Life,” Landau, I. ed., *The Oxford Handbook of Meaning in Life*, Oxford University Press, 43-57.
- [18] Kauppinen, A., 2012, “Meaningfulness and Time,” *Philosophy and Phenomenological Research*, 84: 345-77.
- [19] ———, 2013, “Meaning and Happiness,” *Philosophical Topics*, 41: 161-85.
- [20] ———, 2015, “The Narrative Calculus,” Timmons, M. ed., *Oxford Studies in Normative Ethics*, Volume 5, Oxford University Press, 196-220.
- [21] ———, 2021, “Against Seizing the Day,” Timmons, M. ed., *Oxford Studies in Normative Ethics*, Volume 11, Oxford University Press, 91-111.
- [22] ———, 2024, “Better Life Stories Make Better Lives: A Reply to Berg,” *Philosophical Studies*, 181: 1507-21.
- [23] Landau, I., 2021, “Is Meaning in Life Constituted by Value or Intelligibility?,” *Philosophical Papers*, 50: 211-34.
- [24] McHugh, C. & Way, J., 2022, *Getting Things Right: Fittingness, Reasons, and Value*, Oxford University Press.
- [25] MacIntyre, A., [1981] 1984, *After Virtue: A Study in Moral Theory*, University of Notre Dame Press.
(篠崎榮訳、2021、『美徳なき時代』みすず書房)
- [26] Metz, T., 2007, “New Developments in the Meaning of Life,” *Philosophy Compass*, 2: 196-217.
- [27] ———, 2013, *Meaning in Life*, Oxford University Press.
- [28] ———, 2022, “The Concept of Life’s Meaning,” Landau, I. ed., *The Oxford Handbook of Meaning in Life*, Oxford University Press, 27-42.
- [29] ———, 2023, “The Meaning of Life,” *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Fall 2023 Edition), URL = <<https://plato.stanford.edu/archives/fall2023/entries/life-meaning/>>.
- [30] Naar, H., 2021, “The fittingness of Emotions,” *Synthese*, 199: 13601-19.
- [31] Nozick, R., 1989, *Examined Life: Philosophical Meditations*, Simon and Schuster. (井上章子訳、2024、

『生のなかの螺旋——自己と人生のダイアログ』筑摩書房)

- [32] Prinz, J., 2007, *The Emotional Construction of Morals*, Oxford University Press.
- [33] Rabinowicz, W. & Rønnow-Rasmussen, T., 2004, “The Strike of the Demon: On Fitting Pro-attitudes,” *Ethics*, 114: 391-423.
- [34] Rosati, C., 2013, “The Story of a Life,” *Social Philosophy and Policy*, 30: 21-50.
- [35] Schechtman, M., 2007, “Stories, Lives, and Basic Survival: A Refinement and Defense of the Narrative View,” *Royal Institute of Philosophy Supplement*, 60: 155-78.
- [36] ———, 2011, “The Narrative Self,” Gallagher, S. ed., *The Oxford Handbook of the Self*, Oxford University Press, 394-416.
- [37] Seachris, J., 2009, “The Meaning of Life as Narrative: A New Proposal for Interpreting Philosophy’s ‘Primary’ Question,” *Philo*, 12: 5-23.
- [38] ———, 2016, “The Meaning of Life and Scripture’s Redemptive-Historical Narrative: Illuminating Convergences,” Seachris, J. & Goetz, S. eds., *God and Meaning: New Essays*, Bloomsbury Academic, 13-34.
- [39] ———, n.d., “The Meaning of Life: Contemporary Analytic Perspectives,” *The Internet Encyclopedia of Philosophy*, (Retrieved August 31, 2024, <https://iep.utm.edu/mean-ana/>).
- [40] Skultans, V., 2003, “From Damaged Nerves to Masked Depression: Inevitability and Hope in Latvian Psychiatric Narratives,” *Social Science & Medicine*, 56: 2421-31.
- [41] Strawson, G., 2004, “Against Narrativity,” *Ratio*, 17: 428-52.
- [42] ———, 2007, “Episodic Ethics,” *Royal Institute of Philosophy Supplement*, 60: 85-116.
- [43] ———, 2020, “On the Use of the Notion of Narrative in Ethics and Psychology,” Nahmias, E., Polger, T. & Zhao, W. eds., *The Natural Method: Essays on Mind, Ethics, and Self in Honor of Owen Flanagan*, MIT Press, 119-55.
- [44] ———, 2022, “Narrativity and Meaning in Life,” Landau, I. ed., *The Oxford Handbook of Meaning in Life*, Oxford University Press, 74-92.
- [45] Tappolet, C., 2016, *Emotions, Values, and Agency*, Oxford University Press.
- [46] Taylor, C., 1989, *Sources of the Self: The Making of the Modern Identity*, Harvard University Press.
(下川潔・桜井徹・田中智彦訳、2010、『自我の源泉』名古屋大学出版会)
- [47] Velleman, D., 1991, “Well-Being and Time,” *Pacific Philosophical Quarterly*, 72: 48-77.
- [48] ———, 2003, “Narrative Explanation,” *The Philosophical Review*, 112: 1-25.
- [49] Wolf, S., [1997] 2014b, “Happiness and Meaning: Two Aspects of the Good Life,” *The Variety of Values: Essays on Morality, Meaning, and Love*, Oxford University Press, 107-26.
- [50] 柏端達也、1997、『行為と出来事存在論——デヴィッドソンの視点から』勁草書房
- [51] ———、2017、『現代形而上学入門』勁草書房
- [52] カミュ、清水徹訳、1969、『シーシュポスの神話』新潮社

- [53] 吾峠呼世晴、2020、『鬼滅の刃』23 巻、集英社
- [54] 高田敦史、2017、「ストーリーはどのような存在者か」『科学基礎論研究』44: 35-53.
- [55] 苗村弘太郎、2021、「物語的説明論の現在——歴史学から歴史科学へ」『フィルカル』6: 156-79.
- [56] 野家啓一、2005、『物語の哲学』岩波書店
- [57] 野口裕二編、2009、『ナラティブ・アプローチ』勁草書房
- [58] 羽生善治・NHK スペシャル取材班、2017、『人工知能の核心』NHK 出版
- [59] 村山達也、2023、「人生の意味はどう問えばよいのか——人生の意味を考えることについて考える」
森岡正博・蔵田伸雄編『人生の意味の哲学入門』春秋社、3-31.
- [60] やまだようこ編、2008、『人生と病いの語り』東京大学出版会

著者情報

太田泰幹(一橋大学)